
暁の空

駕籠の鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁の空

【Nコード】

N5485I

【作者名】

駕籠の鳥

【あらすじ】

私立暁学園、そこは楽しい仲間たちが一日の半分以上過ごすところにでもあるそんな場所。

主人公はそこで退屈で愉快な日々を過ごしていく

プロローグ（前書き）

えっと、御久し振りです
いろいろあつて新しく登校しました
温かな気持ちで見えてくれると幸いです

プロローグ

白銀の綿が世界を包み、ふきのとうが大空の青を夢見る。
温かい風は白銀の綿を溶かし、新緑の大地が顔を出す。

ふきのとうは待ちわびた顔を覗かせ、蕾を開かせる。

その温かい風は、地球を暖め、桜達は心震え、踊りだす。

新しい出会いの季節が来た。そう春が……。

白銀の綿が世界を包み、ふきのとうが大空の青を夢見る。温かい風は白銀の綿を溶かし、新緑の大地が顔を出す。ふきのとうは待ちわびた顔を覗かせ、蕾を開かせる。

その温かい風は、地球を暖め、桜達は心震え、踊りだす。新しい出会いの季節が来た。そう春が……。

「来たあーーーー！！！」

「うつさい！！！」

「ほぶう！！！」

そんな御神酒町の一角で、襟や裾には皺一つない新しい制服を身に纏い、麗しく、可憐な少女は目の前にいる少年を蹴り飛ばした。

「逝つてえな！ 危うく痛くところだつたら！！！」

「おーおー漢字が違つぞ漢字が。逆だ逆」

「うるさいわね。あんたがあんたらしくないセリフを冒頭で言うからでしょうが！！！」

「おい。急がないと遅刻するぞ。新年度早々遅刻はまずいだろ。俺ら2年生がよ」

少女はその一言で、身体が反応し、これにまでない目の輝きを放

っていた。自分の鞆を胸に抱き、とても短く今にも見えそうなスカートをひらつかせ、回りだす。その余所から見れば変人そのものを目の前にしている2人は呆れている。

「流石は帝！！　そう！2年生なのよ！！　期待と不安を胸に抱いて入学してくる新生をやさしく包み込んで先輩の誇りを見せるのよ！！　1年間学校で過ごした私たちだからできることよ！！」

自分が上級生になったと、目を輝かせ風と舞い、花卉と踊る。そこには少女の可憐な姿は妖精が舞うかの如く、見るもの全てを魅了しただろう。

「・・・いや、俺らより先輩のほうが知ってるだろ。第一、俺ら2年が3年に勝てるわけねえだろ」

「解らないじゃない！　もしかしたら！！」

「夢、幻だ。少しは現実を見ろよ」

「なによ、もう。あんたこそ少しは夢みなさいよね。帝は小さい頃からそうじゃない。なんでこんな可愛げのない子にそだったのかしらねえ」

手を頬に置き、溜息と一緒に吐き出した。

「なんとでもいえ。先に行くぞ」

目線を合わせずに、大地をしつかり踏みしめ、青年は勢い良く駆け出す。

「なんでよ」

「馬鹿野郎！！　で遅刻するぞ！！！！」

「遅刻遅刻ってまだそんな時間じゃ・・・」

腕時計の指し示す時刻は8時。登校時間終了まであと10分。

「ちょっと！嘘でしょ！！あと10分しかないじゃない！！なんでよ！」

「浮かれすぎた」

「馬鹿！！」

「いてええええ！！」

春の暖かな風を受けて髪をなびかせ、学校までの道を踏みしめる3人。

銀色の綿が溶け、新緑の季節に3人はどのような運命や出会いがあるのだろうか。

そう、殺人や自殺など暗いニュースが多いこのご時世だが、学生にとってはまだまだ解らないそんなことは実感出来やしない。そう、それは穏やかでどこにもあるそんな少年少女の物語

青空の空

私立暁学園。創立35年。男女共学3年生。延700人近くの生徒が通う名門ではない進学校。

地元の中学から遠い県からはたまた外国の子までいくつもの人種、個性を持った生徒が通っている。

珍しく、けやき通りの段丘をのぼり、町の中心で全体を見渡せるところに暁学園は建っている。西洋の趣を感じさせる校門に、堂々と構える本館。レンガ造りの壁には傷や汚れが時代を感じさせる。学校敷地内には本館、別館、体育館、グラウンド、図書館、礼拝堂まであるキリシタン信教が感じられ、礼拝堂にはパイプオルガンまでもが存在する無駄に金のかかった学園である。生徒たちはきつちりとした制服を身に纏い、礼儀正しく登校する、のだ、が……。

「やっべー！！ 間に合うかー！！」

「間に合わせるー！！」

「……」

ここに礼儀も何もない生徒3人組が勢いよく校門めがけ突進する。

「おはよう、春野さん」

「うん！ おはようー！！」

華奢な身体付きで、スカートをひらつかせ、手を振りつつ、駆け足で校門に入る。

彼女の名は、春野明日華。はるのあすか 暁学園の2年生。真面目で、明るい、リーダー的存在。赤みがかかった髪は短く切りそろえられ、身体は細身で、可憐が似合う女の子。

「おい！ ちよつと待てつて！！」

「あんたが遅いのが悪い！！」

明日華に怒られているのが鈴木智貴。すずき ちきマイペースで能天気、ただ判断力がとても優れ、信頼されてはいるが、普段がおとぼけてるの
で、基本馬鹿にされている。単髪の男の子。

「まあまあ、焦るなつて。ここまで来たら焦ることもないだろ」

落ち着いているのがこの作品の主人公、御前帝。ごせんみかど大層な名前の持ち主だが、お偉いさんの息子でもなく、貴族の子孫でもない。ただ名前がすごいだけなのである。冷静だが熱血漢。涙もろい部分も多いが、不真面目でめんどくさがりや。そしてなにより喧嘩っ早い。

「なのね！急がないとだめつて言ったの帝だよ！！ 今は何でそんなに落ち着いてるの！！」

「なんでつて・・・間に合うから」

「あつそ。なんかもうどうでもよくなつてきたなコイツ」

「流石は明日華。よくわかつてるじゃないか」

「解りたくもない！！」

いつもの日常がこれなのである。

普段ゆつくりしているのが帝で、明日華がなんでも仕切り、苦労しているのは智貴で、智貴はいつも泣かされそうになっている。なんで、このようになってるかと言うと、幼いころ智貴は明日華に喧嘩を売りぼこぼこにされて、それ以来、明日華には歯向かわないようになっているのだという。それを超えるのが帝である。帝は若干半不良で、不良たちに絡まれ、こちらもぼこぼこにした・・・という噂だ。実際は誰も知らない。

「でもまあ、間に合うならいいんじゃない？」

「そうだけど・・・いい！ 健全な生徒であるものきちんとした生活を送るべし！！」

「なにそれ？」

急に止まり、二人に指差して意気込む。無論、二人は止まるのだが、意味がわからずにただ立っているだけ。その顔に明日華は若干呆れ気味に説明する。

「何って・・・生徒手帳に書いてあるじゃない。生徒心得18の第3条よ。知らなかったの？ ああ、そっか。あんたたちって生徒手帳見ないもんね。いやいや実際持ち歩いてるのかさえ疑うくらいだからね。・・・で、知ってた？」

「知らなくても何も支障はないだろ？」

「まあね」

「ならよし。第一生徒手帳なんてものは証明書だろ？ 資格でも何でもない証明なんてただの紙切れ同然だよ。そんな証明なんて一つあれば他はいらなくなるだろ？ この学校には学生書があるんだから、生徒手帳なんてそれを保管するものになり下がったくだらないものだよ」

まさかの発言に明日華と智貴は顔を見合わせ、溜息を洩らす。

「帝・・・あんた何気に学校に喧嘩売ってない？」

「失敬な。学校に喧嘩売ったら誰と喧嘩すればいい？ 第一それは俺に圧倒的不利だ。そんな負け戦誰もやらないだろ」

「お前やつぱり利口だな」

「そうか？ そこらへんの不良どもが頭悪すぎなだけじゃね？」

三人はそのままゆっくりと校門を抜ける。遅刻のちの文字も出て

こないほどの余裕登校。他の学生と共に暁学園へと踏み入れたのである。

3人は同じ教室へ向かう2年3組。3人とも小学校から同じクラスで一回も離れたことなどない。誰かの陰謀とも考えられるが、もう奇跡でいいということに話はまとまっている。それでも席はかりはずれこれもまた一度も近い席になったことはない。

各々鞆を置き、帝の席に集まってくる。そんな中、一人の生徒が帝の席に寄ってくる。長髪メガネで、顔立ちは整っており、美形に入る。身長は175前後と言うところだろう。漆黒の綺麗な髪は後ろでまとまっている。

「よう。お前もおんなじクラスだったのか。何たる偶然」

「・・・偶然？ 笑わせるな、お前らほどじゃないが、5年連続お前たちと同じなんてありえないだろ。お前らは必ず仲のいいものを集めるとみた。でなければ、確立的にも天文学的にもありえない」

「はは。流石は鶴ね。なにその理論的考え。だからメガネは理論的に考えられるって思われるじゃない？」

「・・・對外そうじゃないのか？」

それが当たり前と思っているのか不思議そうな顔を見せる。

「お前だけ」

「・・・マジで!!」

「久しぶりに見たなお前の驚いた顔。いつ以来だ？・・・考えるだけ無駄。思考停止」

「お前のその失礼な態度は減点ものだな」

「俺なん点？」

「んゝ50？」

「- 300」

「- 100000」

「智貴ひどっ！ 亮もつとひど！」

「お前なんてそれで十分」

ぬえりょう

鵜亮。中学からの友達で、何でもかんでも理論的に考えてしまうたちが、そのうち飽きるといふ飽きっぽい性質。運動神経は悪くないが、基本は動かない。メガネは本物で、コンタクトは一回だけしたみたいだが、あまりにも人が寄ったので、メガネに戻したという経験がある。

「まあ、それは置いといてだ。お前ら今度の生徒会長聞いたか？」

「生、徒・・・会長？ 誰だっけ？」

「帝知らないの！ あの望月早苗先輩を！」
もちつきさなえ

「望月・・・早苗・・・」

「どうやらかなりの重症らしいな」

胸ポケットに隠し持っている手帳を広げ出す。

「2年1組望月早苗。容姿端麗、頭脳明晰、才色兼備の超お嬢様。

彼女はあのMOONWORKERSの長女で政界融資の大富豪。だが、彼女事態はお金持ちというところは一切強調せず、逆に言えば我々に好意を抱き、普通の生活に憧れているという面を見せる。故に金持ちにある“孤高”という印象を一気に覆す業界の中でも有名人。去年までは如月家の次期当主がいたためにあまり目立ってはいなかったが、それでも3年の如月、1年の望月と学校内でも評判だった。現在学籍生徒の中でも主席。喝、美人としても有名。・・・以上、彼女に関する情報だ」

「・・・どっから出てきた情報だそれ？」

「秘密だ」

「あつそ」

「ところでだ」

「なんだよ」

「暇だ」

「知るか!」

机を叩き、勢いよく立ちあがる帝を、知っている顔からまるで見たことない顔の者が一斉に着目する。彼らを知っているものは大体流れを感じることが出来るのだが、始めての者は動揺を隠せない。ざわついた教室を宥めたのは、新任の担任だった。

「あゝ、お前らいいか？目立つのはとても構わないが、ホームルームをぶち壊さないでくれるか？いい迷惑だ」

その冷たい一言はざわついた教室を凍らせて尚、静まりかえらせ、生徒に恐怖を与える新しい教育の仕方だった。これで生徒が校長へ、保護者が教育委員会へ抗議を荒立てないのが不思議なくらいの教育方針である。

「・・・はい、すみません」

「うむ、自覚が出来ることは素晴らしいことだ。あとで飴ちゃんでもあげよう。職員室に來なさい」

「いえ、結構です」

「む？そうか・・・結構本気だったんだが・・・まあ、いい、ホームルーム始めるぞ」

そのような奇想天外な担任といかにも可哀想としか言えない生徒たちのホームルームが始まった。

朝礼の終わりを告げる鐘が鳴り、生徒たちは次の授業の準備を始

める。クラスのやんちゃどもは終わりの鐘と同時に教室を飛び出し、我先にと何処かへ行ってしまった。真面目な優等生は綺麗に授業の準備を終わらせ、予習をこなし、今か今かと待ちわびている。多くの女子たちも雑誌や化粧品をいじりながら、話を咲かせている。そんな中、一段となにをしているのか解らない集団もいたりする。それが帝たちのグループである。まあ、学校というものは集団生活の中でもさらに集団を決めつけグループ化する一般常識だよねこれ。

「なあ、たるくね？」

「今更だな、智」

「ゲームするか？」

「PSP？」

「モ●ハ●は？」

「いいぜ？何狩る？」

「白い砦」

「蟹か！！」

「たる」

「亮だけだ」

「うんじゃまあいくか」

「おう！」

三人は意見があつたと机をひっぱり、陣を作る。誰ひとり止めようとはしない。ただ例外を除いては。

「おう！ じゃない！ あんたたち何してんの！！」

「何って・・・狩り」

「ここ学校よ！！ それ解つてる？ そんなのをする所じゃないの！！ 学生が将来に向けて勉強するところなの！！ 解った？！」

机を固め、戦闘態勢に入つた3人を優等生生徒会長肌の明日華が

とめる。しかし、それは遅く某ゲーム会社の虜になった3人はおなじみのBGMを少量で鳴らし、電脳世界に突入していた。そう彼らはまさにハンターなのだ！！

「学校？ 集まってみんなでゲームや娯楽をし、休日の成果を見せる場だろ？ だから、日々こうしてゲーム媒体を鞆に忍ばせ、こっそりPlay中だ」

「亮、絶対違うから」

「否、あっている」

「・・・もう知らないから」

ゲームが白熱していく中、廊下を走っている音が響く。

学校内を走るのは原則禁止ではあるのだが、基本守る者はほんの一握りで、対外は守ることはない。それは教師とて同じことで、ここにも生徒の見本とは程遠い教師がいる。新任教師2・3組担任の数学教師である。

「遅れてすまない！」

「ほら来たわよ。さつさと・・・止めて・・・？」

目を見開く光景がそこにはあった。先ほどあった熱がいつの間になくなっていく。周りを見渡すと、机は元に戻り、あたかも何もなかったように各々散っていた。そう、今立っているのは春野明日華ただ一人。

「！！！」

帝は寝たふり、亮はメガネをあげ知らんぷり、智貴は明日華を見て苦笑い。まさに脱兎のごとく、3人は己の席に着き、真面目を貫いていた。それに目がいくわけもなく担任は春野だけを注意する。

「おい、春野。速く着席しろ。お前だけだぞ？」
「なっとなっとなっ……何だよおーーーーー!!」

教室中に明日華の声が鳴り響いた。

1限目が終わり、2時限目が始まる10分間、また4人で集まっていた。その中、明日華だけが、うつぶせていた。先ほどの小事件のショックがまだ残っているらしい。その口からはその中、明日華だけが、うつぶせていた。先ほどの小事件のショックがまだ残っているらしい。その口からは魂が飛びぬけていた。

「何だよ。いつの間にそんな技編み出したの？」

「去年」「」

「うつわゝ、ひくわゝそのシンクロ。てか何で編み出しているのよ？」

「緊急脱出用」

「真面目に答えんなメガネ」

「……答えると言ったのはどこのどいつだ」

「はいはい、うざったいわね」

「明日華キレてね？」

「あれでキレないほうがすごいかな」

「ったく……ぶつぶつ」

小言を呟く明日香を黙ってみる帝。窓を見る。その先には雲一つない澄み切った青空が目の前を広がっている。心配なんてないよと空が皆に語っているかのようだ。それを象徴するかのようになその青空には雀や燕が気持ちよさそうに羽ばたいている。

「問題ねえよ。お前はお前だ。そのままでいいよ」

「えっ?!」

その言葉は意外だったのか、明日香の頬には赤みがかかっている。じとと目を細める智貴。口元は少し曲がっていて、いいものを見つけたと顔が笑っていた。

「あつれ〜? 帝く妙にやさしいじゃん。もしかして〜」

「えっ!?! そ、そうなの!?! わ、わわわ、私・・・帝・・・」

「別に今のままが一番だったから、それでいいと思ったんだよ。それでいいじゃん」

「ちえ、つまんね」

「・・・そ、そんな」

何気ない一言だったが、ある者は喜び、ある者は落ち込むなど、ばればれな態度が入り混じった。そんな曖昧な空気の中、授業開始の鐘になる。己の席へと散りじりになる中、明日香はさみしそうな顔で、帝を見ていた。

「・・・・・・」

それを見ていた亮は眼鏡をあげて、席に着いた。

日常の青

世界中に広がるこの大きな青空。その海に泳ぐ白い雲という魚。日本じゃ白く気持ちよさそうに泳いでいるこの魚も世界の何処かでは黒く、死んでいるかのように浮いているのだろ。そう考えると日本というこの平和な空間は満更でもないのかもしれない。逆に考えると平和過ぎるのも問題か。そんなことはどうでもいいか。

現代国語の教諭が熱い授業を生徒たちが嫌になるくらい行っている中、春麗らかな風が明いた窓から流れ込んでくる。その風を肌を感じつつ、帝は何も考えず、ただ青空を見上げていた。

中々教諭は黒板を書こうとはしない。ただ、拳を握りしめ、熱弁している。そのせいか、生徒たちはやりたい放題やっている。ゲームをする者、手紙を交換する者、居眠りを始める者、国語とは全く関係のないことをしている者、一番端にいる帝からは全て見えていた。ただ、横は見ることはできないが。

（なあ、帝。次なんだっけ）

智貴が教諭ところか隣にいる帝に聞こえるかも怪しい声でたずねると、帝はノートの端をちぎり、何かを書き始める。その紙を教諭が見えない位置を考え、見せる。

”数学”

その二文字は智貴を潰すのには十分だった。

見たくない、首を紙からそらす。「そらみろ」。呆れたように溜息をつき、また青空を見上げる。

それを見ていたのは、眼鏡が光り、その顔が見えない亮だった。

ブリッジを指であげ、睨みつけるとまた黒板に目を向けた。

そして帝を見ているのが明日華である。不服そうに頬を膨らませ、亮と同じく黒板に目を向けた。

授業終了の鐘がなる。

それと同時に大半の生徒が教室をうつつく。それでもまだ熱弁している教諭を5　6人の生徒が廊下へと追い出す。廊下の端へと追いやられても教諭は熱弁している。これはこれで教師の鏡か。

「先生、邪魔」

生徒が嫌悪している。やはりだめか。

帝の席には常に人がいる。彼だけではなく、必ず誰かが彼のそばにいるのだ。今回は彼を含め3人。

名前だけは立派な人。ゲーマー。天真爛漫小僧。その手にはゲーム機が握られていた。

「どうする？　続きやるか？」

「どうせもうすぐ死ぬだろ」

「つか、あとは一人だろ」

結局、某ゲーム会社の狩りゲームの相談である。

「砦蟹は完了するし、何行く？」

「ひとりで行け。俺は天鱗が足りないんだ」

「あつそ、さすがはゲーマー。帝、何行く？」

「トイレ」

「トイレ？　そんなクエあつたっけ？」

「リアルだボケ」

「ちえ、いつてら」

ゲーマーと馬鹿をほつというて、帝は教室を後にする。

この学園の廊下は長い。学校の敷地が長方形のせいか横に校舎が伸びている。

無論廊下に接するトイレも遠い。そのため、他のクラスメイトとの交流も深い。

人見知りしがちな帝でも交流がある。

そう、同級生ならまだいい。しかし、帝たちの教室から一番近いのは3年生の教室前。

上級生徒の面会だ。

「よう！ 御前！ ひさしぶり」

「お久しぶりです。元気でしたか先輩」

「元気元気！！ 元気すぎて逮捕されそうになっちまった！」

威勢のいい上級生は満面の笑みで頭をかいている。

この上級生。中学のころは大層名のある不良だったが、中学1年時の帝にぼこぼこにされ、それ以来帝には頭が上がらないのである。

しかし、帝は見下すことなく先輩として扱っている。

「むちゃは厳禁ですよ。あなた喧嘩で捕まったことあるんですから」

「いやはや、あんときはもうだめかと。御前がいたから助かったんだよね」

「そうでしたっけ？ 覚えてません」

そのまま、我慢の限界に近いトイレへと直行するのだった。

そうして、トイレから帰ってきたとき教室は戦場だった。

飛び交う暴言と教科書。その中で意気揚々とゲームをし続ける眼鏡。そう、明日香と智貴の喧嘩である。ぼこぼこにされて懲りてはいるはずだが、たまにこうなる。

「なにがあつた？」

「
・
・
・
・
よくわかん」

飛んでくる教科書が帝の頭に激突する。その瞬間、暴言も教科書も飛ばなくなったが、教室は冷氣と恐怖が漂っていた。

「み、帝？」

[illegible]

その沈黙の長さは恐怖をあげるのに十分すぎるほどだった。

その後、明日香と智貴は休み時間いっぱい帝に怒られるのであつた。

数学の授業の最中、堂々といびきをかいているものが約一名。チヨークを握りしめ、怒りのパラメーターとして教卓の上にはすでに5本のチヨークが折られていた。何度起こそうと、その人物は1分後には机の上につぶれていた。

「鈴木いゝ……いい加減にしないと先生キレるぞ」

$$\begin{array}{c} \neg \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ \neg \end{array}$$

「すすずきあゝ!!!!!!
いい加減にしないか!!
今は授業中

だ！！ 睡眠なら別の授業にせんか！！」

「Z
Z
Z
Z
Z
・
・
・
・
それはむり」

この神がかつた寢言には流石に限界突破なされたようで、拳は真つ赤に燃えてその怒りの炎を大炎上させていた。そうこれこそ！

「まさか！ゴット・ファイ・ガー！！」

「指でしょそれ」

「突っ込みどころが多すぎて話にならん」

そして、数学教師の手には銀色に光るシルバーが・・・。

「ちよつ、先生！ それはまずいって！！」

「死ねえ！ 鈴木！！」

一直線に智貴に向かうナイフとフォーク。

しかし、智貴は机の上で頭だけで寝返りを打つという神がかった摩訶不思議行動で全てをよけた。

さすがの教諭も拍手を送っていた。

「・・・いや、起きろよ馬鹿」

冷静な帝の声は拍手喝采の中へとかき消されていた。

願いの赤

あのような騒動を起こした鈴木智貴となぜかその隣にいる御前帝。彼らは職員室にいた。昼休みの50分の内、20分を説教というお話に食われていた。長々と語られた話の中心は自分の自慢話だった。注意しつつ自慢を入れることで嫌味を感じさせ、次は聞かないという向上心をわきたたせる作戦なのであるが、基本そのことは生徒にはもろばれなので、意味はなしていない。

「失礼しました」

もうそろそろ落ち着けよー、と片手をあげ、見送る数学教師。皆の待っている屋上に向かっていた。無論帝は不機嫌だ。

「まったく、なんで俺までアレに付き合わなければならない」

「しかたないだろーあの状況じゃ」

数学の授業が終わり、チャイムと同時に跳ね起きる智貴に対し、シルバーを構える数学教師。その標的が自分だと知り青ざめる智貴。他人事のように寝始める帝。巻き込まれてはいけないと逃げる明日華と亮。

逃げる智貴。追いかける教師。寝ている帝。

逃げる智貴。追いかける教師。寝ている帝。

逃げる智貴。追いかける教師。起きる帝。

帝を盾にする智貴。容赦なく構える教師。危険を察知し、拳を振るった帝。

そこでEND。

職員室に呼び出された2人ということだ。

屋上で明日華達と合流する。2人は朝食を食べきっていた。

「御苦労、くろっ」

笑顔という花を満開に咲かせていた。

「ボケカスどもが」

珍しく眼鏡を外し、言葉という暴力を与えた亮。

「ひっでー」

「でも、亮の言う通りよ。何初日から目立ってるのよ」
「んだよもう……」

智貴がふてくされながら昼休みは終了の鐘と共に幕が下りた。

長い一日が終わり、部活に行くもの、話に華を咲かせるもの、さつさと帰宅するもの。

多種多様な行動が目につく。帝たちも帰路にいた。

田舎でもなく都会でもないそんなところに位置にある御神酒町は水田もあればビルもある。

町と言うが、開発地区に設定されてから、町の端に大型デパートが出来たり、中心地にビルが建ち始めている。それでも隣の新都には敵わない。

なんら特徴もない町だが人の温かさは目を見張るものがあった。水田と清らかな小川。そんな道で話が盛り上がっていた。先日のドラマについて話が飛び交っている。春なのに若干寒い風が木々を鳴らす。葉と葉が擦れ歌う。帝は全て聞いていた。話も歌もせせらぎも。平和で最も安全な国だからこそ感じ取れる現実。それが心地よかった。

テレビなどのマルチメディアが報道しているように、自分たちがこの日本でお気楽にただ楽しく過ごしている今も中東の紛争地域では怯えている子供たちが絶えないのだという。大変だと思う。しかし、実際、実感がわかないために何かを行動として移すことはしないだろうと世間の多くは思っているだろう。現に帝自体そう思っていた。自分たちの不幸と言えば、親に捨てられたり、親が殺されたり、その程度だ。下手をすれば失恋をして、それが不幸という人間も少なくはないだろう。確かに、個々の不幸は人それぞれだ。ただ、それを世界に広げたらその不幸がちっぽけに感じてしまうだろう。だから、帝は不幸だと思わないことにした。きっとその先にはまだ面白いものがまってるから。

「……ねえ？帝もそう思うでしょ？」

「えっ……何が？」

「もう、また考え事？」

「コイツのことだ何も考えてない」

「それが正論だな」

「ん、その通り」

普段の会話。それでいい。無理はしない。ただ、余計なことはいらないのだ。

「それよりさ、昨日の事件聞いたか？」

思いだしたように智貴が皆に話を振った。

「うん、あの殺人でしょ？」

「殺人！？どこでだ？」

それでも熱血なところは治らないようで、結局面倒なことを背負

ってしまうのが帝で、それでもそれが帝の良いところと認めているのだ。

「相変わらずね。隣の新都よ。空き巣狙いみたい。犯人は現金を持って家族一家を殺害逃走したんだって」

「・・・何が最も安全な国だ。戦争がなくとも、殺人、強盗、誘拐、強姦。凶悪な事件は収まらないじゃないか。犯人は武器を所持しているが、民間人は自分を守るものがない。それで、生き延びろとは警察も酷なことを言ってると思わないか？」

「しらねえよ。亮の言いたいことはわかるけどさ、でも実際何も動けないのが警察だったりするしな」

「いつか俺が変えてやる！！この日本を！！！」

拳を掲げ、意気揚々と宣言する帝。悪は許せない。善人のそれ。帝のシンボル。なのだが、過去に不良と化しているので、そのイメージは脆いのである。

「はいはい、日本を変える前に自分たちの性格を治そうね」

「なっ、明日華てめえ！俺にも言ってるのか！！」

「とくにあんたに言ってるの」

目が笑った状態で智貴を指差す明日華。それは智貴をあざ笑っているのは見えている。

しかし、智貴には反論できない。明日華に勝てないことが分かっているのだ。負け戦はしないのが智貴の信念である。平凡だけど、平和なこの時間が帝にとって落ち着いた。

空を見上げる。そこには夕焼けによって頬を赤らめた世界が広がっていた。いつまで続くのかはわからない。これは学生の間だけで、社会に出れば皆と別れてこの心地よさが無くなるのかもしれない。だとしたら、今この時間を大切にしたい。それは願い。今は赤い空

も時間がたてば暗黒になり、数多の星たちが笑いながら煌く。この願いをあ^ほの星たちは聞き受けてくれるのだろうか。何億光年先にあるあの神々はこんなちっぽけな存在の為にその力を使ってくれるだろうか。それは無理。頭でわかつてる。そう。星は星。空に輝いて人を魅了するもの。神なんてものではなくて、ただ光っているだけ。だた、もしその一つ一つに神様がいるのならどんな願いも聞き受けてくれそうだと帝は何度か思ったことがある。それは平和を好み、楽しい時間を願う少年の願い。それで、終わるのだと理解はしている。だからこそ、帝は今を大切にしたいのだ。

夕焼けが世界を照らす中、帝たちは各々の家へと帰宅する。

しかし、帝と明日華は同じ道。それもそのはず二人は隣近所で幼馴染。それでも、明日華は帝を意識するせいか、話が浮かんでこない。

「なあ、明日華」

「えっ・・・！な、なに！」

「何驚いてんだよ？」

首をかしげ、顔を近づける。即座に頬が赤らむ明日華。だが、帝が気がつくことはない。

「なっなんでも！」

「？　ならいいんだが・・・今日、お前の家行っているかい？」

「えっ！　なんで？！」

「両親いなくてさ。1週間後帰ってくるらしい」

「おじさんたち・・・仕事で？」

「ああ」

帝の両親は海外を飛び回っている。子供である帝は何の仕事をしているのかは知らないのだが、何度聞いても「それがパパたちの仕事なんだよ」と誑かされるのである。

「えっ・・・でもお姉さんは？」

帝には姉がいる名前は御前桃花。24歳独身。現在彼氏募集中。
見かけは美人で家事をこなすのだが、酒癖が悪く、酒豪である。

「姉さんは旅行だよ。高校の時の同級生と温泉だとさ」

「そっか、うん。わかった。話しておくね」

「さんきゅ」

話が終わるやいなや、空を見上げた。

帝は終始、いや下登校時ずっと空を見ている。会話になると皆の顔を見るのだが、話が終わるとまた空を見上げている。それを見ていた明日華は口を押さえ、笑いだした。

「なんだよ・・・いきなり笑いやがって」

「ごめんね。でも、帝いつも空、見てるから」

「あゝ、そうだな。なんか落ち着くんだよ」

「落ち着く？」

「うん」

鞆を持っていない手を空に向かって掲げる。手を広げ、届けと一生懸命腕を伸ばす。手のひらを広げてもつかむことはない。悲しそうなその表情を明日華は見たくなかった。

「空ってさ、あんなに遠いの自由でさ、俺たちが絶対に体験できないようなことを実現できる。だってそうだろ？そらって言ってもそれは空そらかもしれない宇宙そらかもしれない。無限大の存在なんだ。それってすごいことじゃないか？地上にいる俺たちには限界があるのにソラにはそれがない。俺たちが到達できない領域なんだ。だけど、

空は見えていて安心できる。それが不思議で・・・」

（よくわからないんだ）

不思議で・・・その続きを明日華はなんとなく、なんとなくだがわかったような気がしていた。顔では笑って瞳は泣いている。それは、帝があきらめたくないのに、限界を感じてしまったそんな時に見せる特別な顔。

「空はいつまでも私たちを見守ってる。だから安心できるそれでいいじゃない」

「そう・・・だな」

赤い空が暗く、星たちを生み出すまでのこの時間。二人は空を見上げて帰宅した。

安堵の白

満天の星空がこの町を見下ろし、町の街灯が御神酒町を照らしだす。町の中の民家からは賑やかな声が暗闇の世界を盛り上げる。そんな町の一角にどこにでもある賑やかな一家があった。その明るい家の隣は真っ暗になっている。そう、ここは春野明日華の実家である。

せつせと食卓を準備する明日華と明日華の母親、帝は明日華の弟である祐樹と遊んでいた。

「ごめん帝！ 祐樹が迷惑かけてない？！」

「いや、いいよ。御邪魔してるのはこっちなんだ。これぐらいしないと罰が当たるだろ」

次は何する、と甘えてくる祐樹。急かされつつ真剣に悩む帝。そうして、提案したのはゲーム。祐樹が喜び準備に取り掛かる。それを、温かくやさしく見守る帝。だが、食卓に並ぶ匂いが気になり、目を外す。そこには、色とりどりの主副食が並びほとんどが終わっていた。

「帝おにーちゃん。準備できたよー」

あどけない表情の祐樹に注意することもできずに、食卓に着くよう指示した。祐樹は不満げな表情を見せるも、夕食を見るや否や、洗面所へ走って行った。準備がほとんど終わり、明日華が帝に寄る。

「もう出来るよ。帝も手洗って待ってて」

「本当じゃないのか？手伝うよ」

「大丈夫。もう終わりだから」

その笑顔で必要がないと解り洗面所へ向かう。途中走ってきた祐樹とぶつかりそうになったが、すぐさま避けて、注意した。祐樹は笑顔で返事した後、歩いて食卓に戻った。

洗面所で手を洗いついでに顔も洗う。水が頬を滴り、顎に到達し水玉となって、落ちる。目の前には鏡に映る自分の姿。

「あの頃からは考えられないな」

聞こえるか聞こえないかの音量で、自分に言い放つ。丸くなったと自覚する。

素直に命令されるのが嫌になり、世間に反抗していた中学一年の自分。その力の強さに『鬼の御前に敵なし』とまで言われた中学二年。それでも、明日華も智貴も亮も誰ひとりとして自分を捨てることはなかった。それが今でも不思議に思う。そうして、自分の小ささを知り、人を見て判断するようになった中学三年。丸くなったことで『鬼の御前は爪が削がれ、角でさえ刈り取られたただの人』とバカにはされていたが、冷たい態度と騒いでいた不良をのしたことで、『表の人御前、裏の鬼御前』となってしまった。だが、今はただの高校生。4人で馬鹿やって、毎日が楽しくて仕方なかった。それがいいとまで思えてしまったのはいつからだろうか。

鏡の自分を見つめ続けると脇から呼ばれる。

「帝？ 何してるの？ 早くおいでよ」

「ん？ ああ、今行く」

あのころを懐かしむより、今を楽しく過ごせばいい。そう感じている。過去は過去。過ぎた過程なんてものはどうしようもない。だからこそ、最も大切なのは今をどうあるべきであるか。頭では分かっているけれども行動に出たことがない。今は考えても仕方ない。

食卓を囲んで会話が弾み、箸も進む。勿論、帝もその輪の中に入っている。

「急にすみません。迷惑でなかったですか？」

「何言ってるの帝ちゃん。隣近所じゃない困ったらお互い様ですよ」

そう明日華の母親は言ってくれる。いつものことだ。

しかし、実際御前家は帝と姉のみ。両親は海外で飛び回っている。一体この一家に困ったことがあつたら、子供の自分に何が出来るのかは想像できなかった。だからこそ、お世話になる時手伝おう、そう決めていた。

「帝、律儀になったよね。中学の頃はつんけんして誰も寄らなかつたのにね」

「そんな昔のことどうでもいいじゃないか」

「そうよ、それに帝ちゃんは昔からいい子よ。ねえ？」

ねえ？と言われても帝自信、昔の自分がいい子だと思ったことがないので、はいと頷くこともできないので笑って見せた。

「ねえ、帝さ、あとで私の部屋来てよ。勉強教えて」

「それは構わないが、お前が勉強なんて珍しいな」

「失礼な。私だって勉強するよ。これでも1年の時は10番以内に入っていた時もあつたんだから」

自信気に胸を張って威張る。しかし、その手にはお椀と箸。食事時なのだからちゃんと置けと思ってしまう。

「マジで！それはびっくり。なら俺に聞かなくてもいいだろ」

「だって、常に帝私より前の番号ジャン」
「亮ならともかくお前には負けたくない」

そうこれはつまらない意地。常に誰かの前に立ち、明日華を背にしてきた帝にとって明日華を前に置くことはしたくないのだ。それはいつだって同じ。

「亮君で・・・鶴亮君？ あの子頭いいわよね。明日華にも分けてほしいくらい」

「お母さん！！」

「そんなことないですよ。10番以内なんてすごいじゃないですか」
「1学期だけなのよね」

1学期それは最も簡単で誰もが点数をとれる時期ではあるが、裏手に取れば誰でも点数がとれるためちよつとしたミスでも順位に變動がでるそんな時期。そこをミスしないあたり、かなりの集中力である。集中力と体力は女子の中でも上位にいるのが春野明日華なのである。

ちなみに、男子で頭脳トップは学年長で、亮は次席らしい。体力トップは間違いなく帝。次席は誰かはわからない。帝がすごすぎて他が全く冴えない結果となっていることは亮のデータで知っていた。

「そりゃいいわよ。帝は運動が出来て、亮は頭がよくて、智は皆に好かれて私は・・・」

何にもないと顔が暗く、俯いていた。静寂が楽しい夕食を包んでいた。

「そんなことないさ」
「えっ?!」

「明日華には明日華なりにいいところはたくさんある。正直言って俺らの中でも一番持つてると思うよ。俺らはそんなに優等生ではないし、馬鹿やってるのにお前は真面目でだけど、明るくて女子からだつて人気者。勉強が出来ないくらいなんだ。お前にはその集中力と体力があるじゃないか。完全主義なんて求めるな。そりゃ生徒会長は完璧だけど、そんな人ほど人つてのは近づくことを恐れる。ちょっと足りないくらいがいいのさ。誰かと比べない。お前はお前だ。誰にでも勝てないものはある。よく言うだろ？NO1よりONRY1つて。それは間違いじゃないよ」

「帝・・・」

明日華の母親は、帝を見て頬笑み、明日華に伝える。お椀のご飯を口に運びつつ。

「ほらね？いいこでしょ？」

「・・・うん」

いつの間にか食卓には笑顔が戻っていた。それを元に戻した帝はある意味“御前”なのかもしれない。

夕食を終えて、帝は約束通り明日華の部屋にいた。部屋には人形などの女の子っぽいものや、パソコンや電気機器だけでなく、美少女フィギアなどのものもあった。明日華は飲み物を取りにいつているため、ここにはいない。帝は部屋を一通り、見た後に漫画を手にとっていた。

階段を上ってくる音が聞こえる。扉を静かに開く。

「オレンジジュースでいい？」

「ああ」

中央にある丸テーブルにお盆を載せ、配る。漫画を読んでいる帝にわかるように床を叩く。

（ここに座りなよ）

漫画を棚に戻し、明日華とは対面になるように座る。そんな明日華は少し拗ねたように頬を膨らました。

「で、どの勉強がわからないんだ？」

「・・・ない」

「ん？」

少し、俯きながら小声で溜息混じりにはいた。

「本当はね、解らない授業はないの。ちゃんと授業聞いて理解してるから」

「そうか」

「ごめんね」

「謝ることはないさ」

暫しの沈黙、明りは十分あるのになんとか暗く感じるこの空間。明日華は後悔したかのように俯いたまま何も話さず、帝はジュースの水面を見つめていた。

「聞かないの？」

「なにが？」

「部屋に呼んだ理由」

「・・・聞かれないのか？」

「・・・」

「お前が何を考えてるかなんてのはよくわからないが、年頃の女の

子が好きな男の子を入れたいと思うのは普通だと思うが？問題なのはそれに対する俺の気持ちの表し方だろ？とまあ、これは俺の推測だ。実際はよくわからん」

明日華は全て聞いていたのかはよく分からない。現に明日華はずつと俯いていて、ほんの少し長い前髪で顔を隠していたのである。帝もどうしたらいいのかもわからず、目の前にあるオレンジジュースを口に付ける。どうしていいかわからず、声をかけようと肩を叩こうとしても30？前で止まってしまふ。沈黙はたった10分なのに30分以上にも感じられた。

「あ、あす・・・」

「つく・・・ククク・・・アハハハ」

その突然の笑いに帝は目を丸くしながら固まった。いきなり笑いだした本人は目じりに涙をためてお腹を抱えていた。それでも未だに帝は状況を理解できずにいた。それでも明日華は笑い続けている。

「み、帝・・・本気にしちゃって・・・おつかしー」

「なっ！ 明日華！！！」

現状を理解した帝は顔を赤らめる。そう、自分は春野明日華にかかわれていたのだと。

帝はたまにほんのたまにだが、こうやって明日華に弄られる。しかし、帝はそれが嫌だと思ったことはないし、小さいころからの“定番”になっている。帝は明日華の笑顔が好きだった。それが、好意になるのかはわからないが、ただ明日華には笑っていてほしいと常に思っていた。それは間違いなく好意なのであるのだが。

「・・・帝、ありがとう」

その内容は言わなくても大体のことはわかる。そういつの間にか解ってしまうのだ。言葉を共有しなくてもわかってしまう。それは言霊と言われる霊的な力のおかげなのか、小さい頃から一緒にいるからなのかは断定はできない。

「おう」

カーテンが空いた窓を見上げる。そこにはちょうど半月がほかの星々たちと夜空を照らし、この小さな市を大丈夫と見守ってくれている。実際は太陽の光で反射して照らしているのだが、月光でいいだろう。

何気ないこの一時、騒がしかった中学のころからは考えられないこの一時が帝にとっては何よりも大切にしたい宝物だった。姉がいて、友がいて、両親はここにはいないけど確かにいて、それがいいと思っている。

現に多くの人がそれが幸せと思える人は何人いるだろうか。両親などいらないと反抗期に入り、そのまま親という存在がどれだけ大切かとわかる人間は何人いるだろうか。自分の周りにいて自分を支えてくれる人物に感謝できる人間は何人いるだろうか。少年少女では解るわけではない。自分は苦労も知らずそれが当たり前と思っている“子供”には解らない現実。苦労を知って初めて親と言う存在がいかに大切かを知る。それは“大人”への第一歩。それがいつできるのかは、個人次第だが早く気付いてほしいものだ。

痛感の桃

春の麗らかな朝も眠気を吹き飛ばすことはない。逆に温かな日差しが眠気を向上させ、睡魔との格闘をさせないよう奮闘していた。それに負けまいと目覚ましが起床を促すかのように鳴り響く。部屋中に鳴り響く目覚まし音に、重かった瞼を強制的に開かせた。まだ、思い瞼をなんとかその場に止めて、目を擦りながらカーテンを開く。春の温かな日差しが部屋に降り注ぐ。窓を開けるとこれまた温かい風が春を告げる。揺らめくカーテンに煽られながら帝は背伸びをして、目を覚ました。

「春麗らかな一日」

わけのわからない一言で、自分のテンションを下げている帝。太陽が“問題ない”と励ますかのようにさんさんと活動しながらでも温かな温度を保っている。

やっと目が覚めて、リビングに降りるとソファに何かが横たわっている。それは間違いなく人間の足だ。気にもならないので、朝食の準備をしようと台所に足を向けるが、一応確認のためにソファに近づいた。そこには……。

間違いなく帝の姉である桃花が下着だけで横になっていた。いつものことなのであわてることもなく、姉に毛布をかぶせる。

「まったく、だらしないなあ。風邪ひくぞ」

それは、姉弟としての帝の優しさ。唯一ではないが、海外を転々とする親だからこそ二人で歩いてきた。お互いがお互いを必要としているこの姉弟は食い違わないのだろう。

朝食を作っていると、呼び鈴がなる。手を止めて玄関へと駆け足で急ぐ。

「はいはい、今出ますよっと……明日華」

「おはよ帝。朝食、作りに来た」

そこには制服姿の明日華がいた。昨日、両親も姉もいないと話したことを覚えていたのだろう。帝も一応作れることは作れるのだが、たいしたものは作れない。いつもは姉である桃花が作るのだが、生憎その本人は爆睡中であり、帝が作るしかないのだが、明日華が来てくれるととても助かる帝であった。

ぱたぱたとスリッパを鳴らしながら台所へ向かう。朝食のほうは明日華にまかせておけば問題ないだろう。帝は着替えに自室へと戻った。

制服に着替え終わり、扉をあけると香ばしい香りが2階まで漂っていた。その匂いにつられて足はダイニングに向かう。

「あつ、よかったー。今呼びに行こうとしてたから呼ぶ手間が省けたよ」

「すまないな明日華。朝食作ってもらって」

「気にしないで私がやりたくてやってることだから」

朝食を並べつつ、笑顔で会話を楽しんでいる明日華。その頬にはほんの少しだけ赤みがかかっていた。だが、その赤みは太陽の光がかき消していた。そしてその匂いに誘われてやってきたのがもう一名。

「あふふ、いい香りーなにになーいやーおねーさんうれしいなあ」

なんともいえない寝起きの顔で登場した御前桃花。もちろん下着・

・ではなく、ワイシャツを着ていてエロさがある意味上がった。その格好に平気な帝と顔を違う意味で真っ赤にして慌てふためいている明日華。慣れの違いがここにあった。

「姉さん、ちゃんとした服装で来てください。いくら幼馴染の明日華と言えども、お客さんなんですから」

「みーちん、そんなこと言わないのー明日華ちゃんはずちの家族みたいなものだから気にしない気にしない」

「みーちんはやめろって言うてるだろ！いくら家族でも礼儀はちゃんとしてください」

「はい」

頬を膨らませて着替えに戻る桃花。元不良に礼儀を教えられる人がいたりするのだ。大人として面目がたたない例と言えるだろう。安心したかのように溜息をつく明日華。帝は微笑んでいた。

（ありがとう、ねえさん）

なんだか、ほんの少しだけ落ち着いたことに対して礼を言った帝であつた。

桃花が着替えて戻ってきて3人の朝食が始まった。3人分テーブルの上に乗っていることから明日華は家で朝食をとってないらしい。テレビをつけなくともこのテーブルは賑やかだった。明日華と桃花の会話はまるで野球のバッテリーのごとく、勢いがすごかった。しかし、なんだか柔らかな雰囲気は激しく見せていない。これはこれで才能の一つなのかもしれない。ごく普通の日常つまらなく感じるかもしれないけど、それが当たり前であるべき姿なのである。

「あわわ！ もうこんな時間！ 姉さん会社行ってくるわね！」

「ええ、でも急いで事故らないでくださいね。心配するから」
「うん、わかってるよ。行ってきた」

時計を見て慌てて会社へ向かう桃花。社会人と言うのはこんなに忙しいのだろうか考えた時もあるが、近所のお兄さんはゆつくりと慌てて走り去るということを見たことがないので、自分の姉だけだと自己暗示をかけている帝。そんな彼に明日華は。

「忙しいのね。社会人って」

「姉さんだけだよ」

「えっ？」

桃花とは逆にゆつくりと珈琲を飲む帝。疑問符がたくさん浮かんでいる明日華を置き去りにして。

キッチンに並ぶ二人。はたから見れば新婚夫婦である。しかし、来ているのは私服ではなく制服。これによって夫婦という概念がなくなり、両親が忙しい兄妹のようにも見えてしまう。この場合どちらが兄で姉かというのは触れないほうがいいと断言する。

「助かったよ。ありがとな」

「ううん、こんなんでもよければいつでも」

嬉しそうな明日華を見て、自分自身もうれしくなってくる帝。こんなのを共有の感情というのだろうか。それはさておき、そろそろ登校の時間が差し迫っている。ゆつくりとしてもいれなくなってきた頃合いだ。

「そろそろ行くか」

「そうだね、今日こそはぎりぎりを防がなくちゃ」

気合いのこもった手を突き上げて、自分を高める明日華に対して、そろそろ行かなくてはと思いつつも、ゆっくり行きたいと思っている帝。相反し合っているこの考えがいつも遅刻ぎりぎりへと誘うのだ。普段ならば。しかし、今日に限っては朝食も作ってもらっている、ゆっくりという自分のポリシーは捨てて、明日華に合わせることにした。今日は早めにつけるかもしれない。

そんなに甘くなかった。

智貴と珍しく遅めの亮と合流し、話し合っていると学校の予鈴が町になり響く。しまったと気付いた頃には手遅れというもので、若干の坂を走り続けるが、いつものごとく、遅刻ギリギリに到着した面々は、息を荒立てて教室に入るのだった。

「もう！　なんでよー！　今日は余裕あると思ったのに」

「明日華が話に夢中になるからだろ」

「・・・ハア、ハア、・・・同感」

机につぶれた明日華と亮に対して息一つ上がらず、揚々としている帝と智貴。余裕綽々とゲームを始める。亮も誘ったのだが、体力、精神力共に限界らしく珍しく拒んだ。しかし、いくら元気があるとはいえ時間と言う制限はそれを許すわけもなく。わずか5分でゲームの電源を落とすこととなった。

退屈な授業は眠気に活力を与え、瞼と激闘を始めるが睡魔と言う大魔王は勇者ですら塵にしまい、睡眠と言う天国と地獄の間へ導く。そしてその犠牲者はいつものごとく。

「こらあ！　鈴木ー！！」

「無駄ですよ。智貴は寝だすと1時間しないと起きないですから」

「しかしな、御前。学生は寝るのが本業じゃない。勉強が主なんだ。君たちは親御さんに授業料を払ってもらって今こうしてここにいる。わかるかい？これは一つの親孝行なんだ。それに私たちもそれでお金をもらって生活している分君たちに授業を受けてもらわないと困るんだ」

「・・・それはあなたたちの言い分でしょう？」

「ん？なんだ？よく聞こえなかったんだが？」

「それはあなたたち教師としての考えでしょう？確かに私たちは親の脛を齧って今こうして授業を受けている。でもあなたが言ったのは教師として言い分だ。これが親孝行とか義務とかそういう生徒が納得するとも思っているんですか？親孝行？俺には全く関係ないことです」

帝は叩きつけるかのように教室のドアを閉めて出て行った。暫しの沈黙の後、教師は叱るように生徒に質問した。

「いったい何なんだ？私は間違ったこと言っただか？」

「・・・いえ、先生の言っただことは間違いではありません。彼はそのことは知っています」

「ならなぜ？」

「帝に・・・彼に・・・親のことは・・・一般的な親のことは話さないでください。今ここにいる生徒が普通の生活をしてるとは考えないでください」

明日華はそのまま帝を追った。教師は何も言えず、亮は眼鏡を外し、流石の智貴は寝たふりで黙っていた。

帝は屋上にいた。街全土を見渡せるわけではない。それでも景色が いいの に したこと はない。春の風が髪をさすり、花の香りが鼻を撫る。フェンス越しにみる景色はちょっとだけ見苦しいところも今はなんだか許せる気がしてきた。しかし、その視点は空を見つめ

たそがれていた。

「帝……」

「やつちまつたなあ。ちょっと出しゃばつちまつた」

どんな顔をしているのか明日華には手に取るようにわかった。長年一緒にいる中だからこそ、知りたくなくても知ってしまうのだ。幼なじみの性とも言えいいのか。自分でもちよつと複雑になる明日華だった。春の風は二人を煽るようにちよつと強めに吹く。その風に押されて、明日華は帝に近づき、帝の背中にそつと触れる。残り一步。たつた一步で帝に近づくの、その一步が歩き出せない自分と帝には自分が作っている壁がある。それは自覚していた。だけれどいつも壊せずにいた。そして今もそう……。明日華にはそれがいっぱいいっぱいだった。

「だいじょうぶだよ。……帝はみんなの知らない苦労、いっぱい知ってるもん。……少なくとも私と智貴と亮はいつでも帝の見方だから」

「……明日華」

「ん？」

「サンキュ」

「どういたしまして」

触れていた掌を離す。掌にはまだぬくもりが残っていた。しかし、悪戯好きな春の風は少女の気持ちをあざ笑うかのようにその熱を持つて行った。

（意地悪。……どうせなら私の気持ち……連れてって届けてよ）

空気の読まない風に叶わぬ願いを込める。

「先、行ってるね」

「ああ」

（どうせなら・・・追いかけてきてよ）

少女の思いはやはり、春の風と共にどこかにすり抜けていった。
こんなにもどかしい気持ちいつからあっただろう。いつの間にか芽
生えていたこの感情。痛くて、張り裂けそうなこの思い風と共にあ
の人に届け。

感謝の十色

授業終了の鐘が鳴る。静かだった校内が一斉に騒ぎ出す。屋上はその声も制限されるが、それでも騒がしい声は耳に届く。その声も無意識に聞くとその声は心地良い。あまり寄り付かないこの屋上に珍しい客が足を運ぶ。少し長めの髪の毛を束ね、珍しく眼鏡を外した亮が屋上に来た。

「良い風だな。清々しい」

「・・・めずらしいじゃん」

「俺だって屋上ぐらいいくさ。ただいつもは教室のほうで落ち着くのでね」

帝の隣に立つ。流れていく髪は美しく、美男子というのも頷ける。初めて会った人は女性と勘違いするのではないかと思うほどである。幾分過ぎたか、いや実際は数十秒つてとこだろう。2人は屋上から見える俯瞰をただ見つめていた。穏やかな街並みの向こうに高層ビル群が立ち並び、発展の違いが見てわかる。

「俺は明日華や智貴より付き合いが短いからな。何も言わないが、あいつらが不安を持つような行動は慎め。・・・俺は興味ないかな。お前が話していいと思ったら、その時は聞いてやる」

「・・・ありがとう。でも意外だ」

「何がだ？」

「亮の性格ならもっとキツイのくと思った」

「そのつもりだったがな。明日華の顔や智貴の態度でやめたんだ。誰にだって話したくない過去や経験はある。もちろん俺にもな。そんなのあって普通・・・当たり前なんだ。ただそれは過去で、縛られるものじゃない。過去は見るだけでいい。振り返ることも見つめる必要もない。重要なのは・・・その過去を持ってどう変わったかだ。変化がなければその過去に意味や価値なんてものは重さを持たないし、それに縛られれば、過去に意味があったとしても、縛られたそいつが愚か、悲しい存在になる。たとえ、いい過去であったとしても、経験したやつが悪い変化であれば、その過去は腐ったものになり、思い出したくも話したくない過去であっても、本人が成長したならそれは決して悪いものじゃないと思う。お前はかなり良い方向に変化したらしいからな。悔むことも嘆くこともない。むしろ誇っていい・・・いいか？過去なんてラベルは糧だ。必要なのは今。重要なのは未来ってな」

亮の意外な言葉は帝を驚かせた。亮は確かに博識であるが、人生論を語るとは思いもしなかった。目を丸くする帝と遠くを見据える亮。

「亮・・・お前・・・キメエ」

「なっ！ てめえ！ 人が心配してるってのになんてやろうだ！」

「アハハ！悪いわい・・・サンキュ亮」

わかればいい、と眼鏡を掛け直す。授業開始のチャイムが鳴る。

「さてと、行くか」

「おう」

少年は戻る。己がいるべき場所、受けるべき義務をこなすために過去がどうであれ、そのようなものに空は縛られない。自分たち

の過去を見てきている大空はその感情を見せることはない。誰かが死のうと、生き延びようと、産まれようと、誰かが喜びや悲しみを共有したとしても大空は変化しない。時に晴れ渡り、心地よい青を見せ、時に化粧のごとく雲を塗り、灰色で顔を隠し、隠したその瞳から大量の真珠を打ち落とし、時に頬を赤らめ、美しい紅を見せる。もし、神と呼ばれる絶対的な存在、（ここでは創造主でしょう）が空の表情を決めているとしたら、その創造主に時間など縛られるものがなく、やはりそこには過去や未来などなく、ただ今しかないだろう。だからこそ創造主は人外と呼ばれるのだろう。話はそれってしまったが、人が過去に縛られず、未来を決めてしまった時、創造主になるのだろうか。

まあ、そんなことはない。

教室に戻ると、今までの日常が待っていた。先ほどの小さい事件がうそのようである。

実際人間関係なんてそんなものだ。自分に害がないとか、興味がなければ相手が何をしようが無関心になり、誰一人として関わろうとしない。帝がどれだけ注目されようと数分たてば忘れるものである。

席に着く帝。皆からの視線はない。脆弱な空気が帝を包み込む。しかし何ら問題はない。このクラスにはその空気をぶち壊すKYB（K u k i Y o m e n a i B a k a）がいるのだ。

「みつかどー！！ 何する！！ どうする！！ 暴れるかー！！」

天真爛漫、純粹無垢と言えば聞こえがいいが、ただ自分の考えでしか行動せず、かつ何も考えないそんな人物。そう、智貴である。彼は、KYBと言われるが、決して成績が悪いわけではない。なんか雰囲気とかバカっぽいとか、空気たまに読めない、という口ぐちがクラスに広がったのが原因である。ちなみにその大元は、明日

華と帝なのだが。しかし、彼は何と言われようと自分を变えない
屈強な鋼の心を持っている。ただ、頑固なだけなのだが。そんな彼
は皆に好かれているのもまた事実。敵を作らないという点において
は彼は最強なのかもしれない。

「いや、やめておくよ。今はそんな気分じゃない」

「そっかーまあいいや」

「もっと違うことじゃないのか？」

「正解！」

机をたたき、顔を帝に近づける。その瞳はきらきらとし、新しい
玩具を見つけた子供のように。歓喜したのか、その場で回りだし、嬉
しさを表現していた。このままではただの痛い人であるが、智貴だ
からこそ認められるのである。

「さすがは帝！！ 実は・・・合コンしようぜ！！」

「合コン？ いいぜ、どこでやる」

その場が固まった。智貴も驚愕の顔を隠せないようにでヒア汗すら
見える。周りの女子たちも、驚きながら帝を見つめる。もちろん本
人にはわからないように。男子から聞こえる阿鼻叫喚、女子から聞
こえる義疑惑の念。やってしまったと後悔してももう遅い。教室は
驚愕と失望の渦が彷徨っていた。

「じよ、冗談だよ！ 冗談！！」

「まあ、そんなとこだと思っただよ」

呆れたようにあたかも確信があったかのように平然としている帝。
智貴はあたりを見回している。あたりの女子からは安堵が見えた。
男子からは落ち着いた雰囲気漂っている。こう見ると帝の人氣が

実感する。帝とは「不謹慎、ふまじめ、ちゃらい」などと負のイメージはなく、「純情、冷静、潔白」などと言った正のイメージが強いらしく、女子はもちろん男子からも人気が高い。しかし、智貴は思う。

（こいつ・・・元不良だぜ？）

帝の場合はなりたくてなったわけではない。それは智貴も重々承知しているのでいままでつるんできたのである。その事実を知らなければ関わりたくないその様な人物だった帝。しかし、今はそのような面影はなく、いたって普通の学生である。ただほんの少し喧嘩が強く、喧嘩っ早いだけのどこにでもいる学生なのである。

「なあ、智貴、明日華は？」

「ん？ あいつならほれ」

智貴が指さす方向を見ると、明日華は机の上で潰れていた。

「どうしたんだ？」

「さあね、俺が知るわけないじゃん。お前のほうが知ってんじゃないの？」

「心当たりがないのだが・・・」

「ならお前が気がついてないだけだな。明日華が簡単にああなるかよ」

「明日華だって女の子なんだ。弱くなる時もあるさ。しかし・・・」
「心配なら聞いてこい」

振り向くとそこにはぶつきら棒とした亮がいた。帝と別れてからたった数分でこうなったことは明らかで、聞くことを躊躇われたのだが素直に聞いてみた。

「亮、どうした？」

「ちよつとな……。アイツに脅された」

「アイツ？」

「俺のことは放っておけ。それより明日華が心配なのだろう？行つてこいよ」

ほんの少し顔がゆるむ。その笑顔を見ているとなんだか落ち着くのだが、だが実際は落ち着くわけがない。亮と帝が揃うだけで、クラス的女子は一気に盛り上がる。その容姿から亮もクラスの女子からはものすごい人気がある。1年時は学園で行われたプリンス・プリンセスで第2位という評価を得ている。ちなみに昨年の1位は元生徒会長である。

席を立ち、明日華のもとへよる帝。

「明日華、大丈夫か？」

「ん？ ああ、大丈夫・・・問題ないよ」

「いや、結構ヤバそうなんだが」

「いあね、なんかいやな予感すんのよ」

「いやな予感、ねえ・・・」

その嫌な予感はあたるのか。帝も明日華も智貴も亮も予想していないことが起こるのだろうか。対外いやな予感というのはよく当たるものだ。それがどれだけ小さなことでも嫌な予感、予兆というのは信頼や予言なんかよりも当たる確率が高い。それは人間の深層心理に基づいて起こったりもする。何気ないことが、いつもより嫌なことだったり人間の心によって「予感は当たった」という現実をもたらす。そう、人間というのはそこまで心弱い生き物なのだ。

過去の黒

嫌な予感というのはかなりの確率で当たる。よくそう言われるけど俺は思わない。結局予感なんてものは人が作り出す予言みたいなものだ。1999年のノストラダムスの大予言とかよく言われていたが、あれも何も起こらずガセに終わっている。だから、俺は今日の今まで『悪い予感』は信じてなかった。そう、あんなことが起こる前までは。その予感はすぐに当たることになるのだ。

帝は、今まで通り登校した。何も変わらない変調もない日常に屈していたのかと言われるとそうでもない。ただそれが心地よい。そう思っていた。いつもの風景、道、友達、先生、学校。それを眺めて学校という檻に足を踏み入れた。

教室ではいつもの光景が目映る。女子たちの笑い声、男子たちの悪ふざけ、男女の会話、そして帝の席に群がる悪友たち。いつもの通り席に着き話に加わる。そう、今までの通りだったはずだった・・。

担任が教室に入って点呼をとる。珍しくそのまま授業に入らない。何かの連絡だと帝は外を見降ろす。体育の授業なのか生徒たちが体操服で移動している。

「えゝ、急だが転校生を紹介する。入りなさい」
「はい」

女の子の音がする。転校生はどうやら女子らしい。とくに興味はなかったが一応顔を見てみようと思いを向く前に智貴の顔を見る。その瞳は輝いていた。実にわかりやすい。だが、その輝きが曇りに変わるのに時間はかからなかった。

扉が開く。女の子は一步前へ、全体像があらわになる。教室は歓

「おい．．．うそ、だろ．．．なんであいつがここに．．．」
「な、なんで．．．」
「まじかよ」

「急だが、ご家庭の事情により転校してきた天条院奏君だ」

「天条院奏です。よろしく願いますわ」

「えゝ天条院の席は……おお、御前の後ろが空いているな」

「お久しぶりね。帝、智貴」

「・・・ああ」

「なんでお前がここに」

クスリ、と頬笑み席に着く。その表情は変わることはない。ただ、帝、智貴、明日華を見るとときに表情が曇ることはあった。動揺を隠しきれない3人に対し、亮はただ黙ったままひそかに見守った。

午前の授業が終わり、クラス一斉に天条院に群がる。それを見計らったように帝と智貴は席を立ち、亮のもとに寄った。亮の隣には明日華もいた。

「どういうことが説明してもらおうか」

「そう、だな。亮には話しておかないとなただここじゃ話にくいから屋上行こうぜ」

4人は各自弁当を持って屋上へと足を運んだ。

この時期の屋上は涼しく、空気も澄んでいても過ごしやすかった。弁当に箸をつつきながら過去について帝は話し始めた。

帝の過去の話。

武術の名家に生まれた帝。だが、帝は規則、規則と縛られるこの家が嫌いだった。そして、父親と殴り合いのケンカの後、家を飛び出した。無論幼い帝に行く末などない。親戚の家ですら帝にとって苦痛でしかなかったのだ。だから、強くあるうとした。ただ、ひたすらに孤独を選んだ。家の者は探さなかったのだ。しばらくは持ち出した金額で何とか暮らしていた。しかし、そう何日も持つわけもなく、金は底をつき、途方に暮れていた。そんな時に孤児院の院長に拾われたのだ。

なじめない孤児院の生活。周りの子供たちは帝の勝手な『強さ』に怖がっていた。現に帝は年の割には腕っ節が強く。力は歴然としていた。そんな時だった。近所の子との交流で鈴木智貴、春野明日

華と出会った。威厳とした帝に近所の子供でさえ、避けていたのだが、智貴と明日華は近寄ったのだ。無論、帝は拒絶を示したが、2人はしつこく帝に近寄った。たった数時間の間だったが、帝は2人には心を開きかけていた。そして、皆が帰る頃には帝は2人と話せるようにまでなっていて、孤児院の先生は帝の笑顔をその時初めて見たという。それからというもの、帝はよく孤児院を抜け出しては智貴と明日華と遊んでいた。生まれて初めて生きていることに感動したのだ。だから孤児院の生活は全く苦にはならなかった。他の孤児院の子供たちとも交流を持ち、やっと年相応になれたのだ。

そして、転機は訪れた。

孤児院を援助している名家に訪れることになったのだ。だが、大勢で行っても迷惑がかかるということで代表が選ばれた。それが帝このときになって帝は孤児院のリーダー的存在になっていた。しかし帝は気が進まなかった。そうただ『名家』に帝はいい思いしなかったのだ。

帝はその名家に訪れた。いかにも金持ちという威厳のある大豪邸だった。帝は憂鬱な気分で庭を歩いた。そして出会った。髪は金髪で、蒼い瞳の少女に。館の主らしき人が紹介してくれた。

彼女の名前は天条院奏というらしい。奏とは挨拶を交わし、そのまま孤児院へと帰った。

しばらくして、帝はまた天条院家へと出向くこととなった。無論帝は気が進まなかった。しかし、奏と会うのはほんの少しだけ期待していた。今度、天条院で出会ったのは黒髪で漆黒の瞳をした娘だった。その娘は自分は天条院奏と言っていた。違和感はあるものの、幼い帝には大した問題ではなかった。彼女が奏というのなら奏なのだろうと自分に言い聞かせた。孤児院の先生と天条院の人との話を待ため、帝は奏と話をしていた。帝は人と話すことは苦ではないし、人見知りをするわけではなかった。しかし、唯一『名家』の人間だけは信用することができなかった。

奏とは2時間ほど話していた。後々に帝も奏では打ち解けてい

た。お互いのこと、名家と言われる家に対する不満など、笑いあい、親身に話し合った。その2時間はものすごく短かった。

帝は天条院に行くのが楽しみでしかたなかった。孤児院の先生に無理言つて、明日華と智貴を奏に紹介するほどに。明日華も智貴も奏とはすぐに打ち解けあい、両親の了解が下りると4人は暗くなるまで遊びつくした。

奏を含めた4人は同じ中学に入学した。だが、歳を重ねるにつれて、帝の中にあつた疑問という風船は膨らみを増していた。しかし、やはり大したこともないのでそつと胸の中にしまっていた。そうして何気ない日々を過ごしていた。しかし、帝は相も変わらず3人以上には拒絶を露わしていた。いくら人見知りをしないとはいえ、人を信じることに抵抗を持っていたのだ。そして売られたケンカは買っていた。それでも、大きな問題なく中学2年が終わろうとした時、事件は起きた。

それは寒さが身を凍てつくことが実感出来たころだった。下校中、信号を渡った奏が引かれたのである。原因は運転者の信号無視。奏は私立の有名病院に運ばれたが、事故の1週間後奏は息を引き取ったのである。帝は悔んだ。なぜ奏を最後に歩かせたのか、一番近かった自分が助けなかったのか、そのことをずっと後悔して自分を責めていた。奏は事故の後日意識を取り戻したが、かなり弱っていた。そのおかげで、家族以外面会謝絶となっていたが、息を引き取る2日前本人の意向で3人だけ、面会となり30分ほど話した後、奏と帝だけで話していた。

弱った奏では振り絞るように帝に話した。

「帝、ごめんね。・・・心配掛けて・・・でもね後悔しなくてもいいよ・・・わたしね・・・幸せ・・・だった。・・・ありがとう・・・もう、ケンカ、しないでね」

その言葉で帝は今まで押しこらえていた涙をあふれださせた。そ

の言葉で自分に押ししかかっていた重圧から救われたのである。そして、震えた声で感謝を伝えた。”ありがとう”と。

もうひとつの事件が起こった。それは奏の葬儀に起こった。

帝たちも奏での葬儀に行くために、天条院の家に向かった。天条院の執事が帝たちの前に現れ、別の会場に連れて行かれた。そして、帝たちは驚愕の事実を知った。そこにいたのは一人の少女。金髪で蒼い瞳の可憐な女の子。帝が天条院の家で出会ったその娘であった。そうして告げられた。

「天条院奏です。このたびは姉の雪姉様の葬儀にご参加くださりありがとうございます」

この一言はとある事実を告げていた。それは今までつきあっていた少女は奏ではなく、雪という存在ということ。そして今目の前にいるのは天条院雪の双子の妹天条院奏、つまり本当の奏ということ。

変化と無変の白

それは衝撃的な出会いだった。雪がいつ降り出してもおかしくはない肌寒いあの日。その季節にはとても似合っている名前を持つ少女を亡くし、その葬儀で出会った響きのいい名前の少女。帝は4年ぶりに天条院奏と再開した。自分たちと同じ年齢とは思えないくらいに喪服を着こなし、金の髪と蒼の瞳はまるで飾のように、一体となつて邪魔をしてはいなかった。

「天条院奏です。このたびは姉の雪姉様の葬儀にご参加くださりありがとうございます」

きちんとした挨拶は本当に同い年なのかと疑うくらい礼儀正しかった。更に、その透き通った声は清廉潔白とした美しさを帯びていた。身なりは“黒”しかし心は“白”。その境界線なき、灰色をした存在だった。

驚愕を抑えきれない2人に対して、冷静でいられた帝。今ここにあの時からある疑問が消えたのだ。自分が出会った少女は彼女なのだ。死者を弔う場には相応しくない『嬉しさ』という感情が帝には芽生えていたのである。

3人は応接室へと通され、椅子に座らされた。その正面には奏がいる。

「この度は姉の葬儀に来てくださいまして誠にありがとうございます。心から感謝いたしますわ」

礼儀正しく一礼。流れるその姿は美しさそのものだ。

「あなたたちをここに読んだのは他でもありません」

静寂が一带を包み、3人は身動きが取れずにいた。そして奏から出た一言に身震いした。

「・・・雪・・・いえ、姉さんの罪についてです。私は姉さんの妹としてお詫びを言わなければいけません」

その瞳はしっかりと3人を見つめ、何が来ても強い視線だけは崩さないという意思の強さを感じ取ることができた。裏を返せば、すべてを背負い、どのような仕打ちにも耐えるという念がこもっていると云ってもいい。帝にとっては懐かしい感覚。しかし、彼女が背負うことによって儚く、それ以上に美しいと感じてしまった。

「罪とかどうでもいいよ」

その言葉にその場にいるものは言葉をのんだ。智貴も明日華も奏でさえ驚愕の表情を隠すことはできなかった。

「俺が知りたいのは君があ那时的奏なのかということ」

「・・・ハイ」

その返答は微かで、まるで霧のように薄く、しっかり聞いていても聞き逃すくらいだった。そうして帝は広間を出た。その瞳は悲しみも、恨みも、喜びも、感情というものがなかった。まるで人形のように。

「あんたたちの罪が何か知らないけど、帝が許すまで私は許さないから」

「・・・」

帝を追うように明日華も智貴も広間を出た。
葬式を終えて、何の未練もなく3人は天条院家を後にした。そう
して天条院奏に会うことは一切なかった。

「そうか、それがお前らの俺には話してない過去ってことか。いや、
ちがうな。帝が帝であるべき過去と言ったほうがいいのか？ まあ、
それは聞かなくてもいいな。理解できる。今の問題は帝と天条院奏
の関係ということだな。明日華や智貴は第三者で特には影響もなく、
関与は少ない。となると問題はお前だ」

その鋭い眼光は帝をとらえていた。獲物を狙う鷹のようにその眼
力には威厳と脅威二つの強さを秘めていた。帝はその瞳をただ受け
ていた。その冷たく、何も考えてもなく、感情もないそんな霞な瞳
で。

「お前は どうしたい？ その時のようなその瞳で何を見る？ 何を
感じ取る？ お前は・・・何を・・・いや、この先は言わなくても
わかるだろ？ お前は お前の やりたいようにやればいい。俺も明日
華もバカもお前の考えに従うさ」

「亮、 なにかとひどくない？」
「どこが？」

一つの広間に響き渡る笑い声。いくらシリアスになろうと4人に
かかれば1分もいらずに笑いに変わってしまう。ある意味才能の一種。
だからこそこの集まりには暗さというものは存在しない。クラスに、
学園に必要なメンバーと言っても過言ではないのかもしれない。

「さて」

亮はいつものごとく、眼鏡を上げて、久しぶりに見る笑顔で皆のほうを向いた。

「もうすぐ授業だ。 戻ろうか」

その笑顔は純粹に帝の心を落ち着かせた、いつもは無愛想で冷たく、誰にでも同じように接している亮がとても温かく、優しく感じた。 いや、そうではない。自分が勝手に作っていた壁が過去を話すことによつてなくなったのだ。 4人の絆が深まった瞬間だった。

教室に戻った4人に訪れたのは驚愕という鉛玉である。 なぜならば教室の一角がものすごく暑苦しいことになっているのだ。 男女隔たりなく集まったその塊はまるで人間団子のようなだった。

「なんじゃありゃ」

「ああ、あれ？ フッフ・・・皆、天条院さんに夢中なのよ。 悪い子よねーやけちゃうわ」

教科書を抱えたいかにも委員長ですと言わんばかりのしつかりとした姿勢に、少しだけ柔らかな言葉使いのThe・委員長さんが現れた。

「委員長、夢中と言ってもあれはどう見ても頭を垂れて、何かを欲している犬に近いと思うだが？ まるで自分を良いように見せて、後ろだてを狙っている社交界だな」

「あら、まるで社交界の場がどのようなのか知っている口ぶりですね鶴さん。 経験があるのかしら？」

「いや、別に。 俺の想像だ」

「そう・・・想像ですか」

チャイムがなると同時に各々の席に着く。こうも一斉にしかもそろうとテレビで見る北朝鮮の兵隊を想像してしまう。私たちも座りましょう、と委員長はうなずく。亮は委員長の態度が気に入らないようで、溜息をついて洪々と席に着いた。そうなると立っているのは帝と智貴と明日華である。無論、立っているのも変なので席に着く。横を通り過ぎた智貴がつぶやく。

「今後どうするかはお前次第。今の段階では気をつけろと忠告しておくよ」

余計なお世話と、帝は肩を軽く押す。智貴はきょとんとしていたが、すぐに笑顔になり陽気に席に戻った。帝も席に着く。横目で奏を見たが、あの頃より一層奇麗になっていた。しかし、あの頃と違うのはどこか弱く、儂く、簡単に壊れそうなのに強く自分を見せているそんな雰囲気だった。

「このクラスはとても面白いですわね。これから楽しみですわ」
「・・・そうか、ならよかったよ」

やはり会話が弾むことなく、先生が荒々しく登場し、5時限目が始まった。

一日の終わりを告げる鐘がなり、学生にとって自由というなの時間が訪れる。部活動に励む者、勉強に励む者、自宅へと急ピッチで変えるもの様々。多くの学生が入り混じるそんな空間になる放課後。帝を含む4人は教室に残っていた。何もすることなくただ話にふけっているだけなのだが。そのようなことをしても時間は何かをするための思考をさせることすらさせてはくれない。

「帰るか」

「うん」

結局、帰宅という手段をとるしかないのである。部活をやっていない生徒なんてそんなものだ。勉強のために残る生徒はあまりにも少ない。いや、実際は皆無と言っても過言ではないのではないだろうか。

いつものようにグランドの横を通り、校門に向かう4人。そこで夕焼けを背に一生懸命走る生徒がいた。帝たちはその生徒に目を奪われていた。ただひたすらに走るその女子生徒は長い髪を後ろで束ねたいわゆるポニーテールという髪形をしていた。やや赤みのかかったその髪を揺さぶりながら女子生徒は無心に走り続け、帝たちに気づいて足をとめて、帝たちに近づいた。

「おや、ここであうなんて珍しいね」

「お久しぶりですはるかね遙先輩」

「気にしなくてもよかったのに遥姉さん」

「いや、いいんだ」

彼女の名前は御前遙。1つ上の上級生で、帝の姉に当たる。少し焼けた薄いこげ茶色の肌に、赤みのかかった長髪。おとなしそうなその雰囲気。運動部にはつきものの『活発』とはまた反対の『落ち着いた』が似合う大人な彼女。そして暁学園が誇る陸上部の部長にしてホープ。智貴や明日華とは小学校からの知り合いでもあり、2人にとっても倒れる姉御なのだ。

「県選抜の合宿は終わってたんですか？」

「ああ」

「ああって・・・姉さんそれじゃわからないよ」

「いつ帰ってきたんですか？」

「今日の昼だよ」

欠点として口数がとても少ない。しかし、交友はとても広くコミユニケーションに困ったことはないのである。逆にその口数の少なさがまた彼女の人気でもあった。

「君は・・・鶴亮くんだったかな？」

「やっと覚えてくれましたか。1年かかりましたね。いや、自分もあなたとはあまり接しなかったわけですから仕方ありませんが」

くすくす、と笑いだす遥。少しふてくされる亮。

「何か？ 俺はあなたに笑われるようなことは言っではないはずですが」

「ククク・・・すまない。いや、早苗の言つとおりの子だなとね」

「む？」

早苗というのは無論、会長の望月早苗のことである。会長とホーブ同じ期待を背負うものどうし、仲がよいのである。実際のところ望月早苗の親友は目の前にいる御前遥というものとても有名な話ではある。

「帰るのか？」

「この時間に鞆持つて校門に向かってたらそうなるでしょ。それより戻らなくてもいいの？」

「そう、だな。戻らないといけないな」

「なら俺らは帰りますよ。遥先輩は部活頑張ってください」

「そうするよ。またね、智貴、明日華、鶴君」

そうして遥は駆け足で部活の輪に向かって行った。少し名残おしきがこれ以上迷惑はかけることなどできない。いつものように自分

たちが帰るべき場所へと帰ることにする。その一步を歩きだし、校門前で帝が思い出したように立ち止った。

「そっぴゃ、今日俺食事作らないといけないんだった」

皆で笑いながら、帰宅のルートからスーパーへの買い物ルートへと変更されるのだった。

いろいろな問題を抱えつつも日常は何事もなく過ぎていく。だからこそ誰もが同じことを言えるのだ。

——また明日——

困惑と悲観と歓喜の混色

穏やかな日常をかみしめてみる。いつもの通学風景、いつもの学校、いつもの教室。そう、日本の学生に与えられた“当たり前”。本来ならそのことはとてもありがたいのだが、普通の学生はそうは思わないらしく、学校などなぜあるのか。そのような疑問符を常に頭に浮かべながら過ごす。そしてここにも当たり前を当たり前と思わない大バカ者がいた。

「なあ、なんで学校って滅びないのかな？」

「いくなりどうした？ 現実逃避しても学校は消えないぞ？」

机に頭をひっ付けこれ以上ないくらいに姿勢が悪い。このまま机と一体化してしまうのではないかと思われるほどだ。そう、鈴木智貴は現実逃避に走っていたのだ。しかし、それもいつものことなので誰も気にすることはない。

「帝さ、なんでそう真面目な考え出来るの？ 元不良のくせに」

「お前殴るぞ？ 不良」不真面目と断定するな。世の中には真面目な不良さんだっているのだ」

「お前の場合は面倒だから考えるのをやめてるだけだろう？ それのどこが真面目だこの馬鹿どもが」

「亮さん、いつにもまして毒舌っすね」

「貴様らにはこれくらいが丁度いい薬だ。まったくなんで俺はこんなやつらとつるんでいるんだろうな全く」

珍しく眼鏡を外したかと思うと、レンズを凝視し納得いったかのように戻した。この日もノー眼鏡亮を拝むことができなかったことはある意味残念なことである。それに気づいた亮は自慢げな表情の

まま教室を出て行ってしまった。

「えっ？ 何？ 今の嫌がらせ？」

「十中八九な」

ちえ、嫌な奴とこぼしながらまた机に潰れた。そしてそのまま寝息を立て始めてしまった。どうせならずっと起きてみるよと念話で送ってはみたものの、努力は実らず智貴は完璧に寝いった。その光景をみた明日華はつかつかと智貴の前まで来て、机をあさり、プリントの束を丸めて……

スパーン！！

豪快な音を立てて、頭に叩きつけた。頭を押さえ、しばらく動かなくなる。顔を上げ、鼻血が出ていないかを確認して……。また寝た。怒りマークが明日華の頭に見えた。一度、自分の席に戻る。そうして、今度持ってきたのはドラ。一体どこに隠していたのかは気になって仕方がないが流すことにして、観察に専念した帝。しかし、居眠りの常習犯である智貴には全く効果がないようで、教室中いや学校中に鳴り響いたドラの音は無残に消えていった。これに関しては流石の明日華も口が塞がらないようでそのまま立ち止っていた。しかたないので帝は智貴のそばにより耳元で囁いた。

「早く起きないと俺が永遠の眠りにつかしてやるぞ？ それとも亮にしばかれるか？」

「はい！ 起きますす！！ 起きさせていただきますす！！」

さっきまで爆睡していたのが嘘のようで、目元はぱっちりと開き、活力はいつも以上に回復していた。

そこまで嫌になるほどなにかされたのか、とクラスが思う中、明日

華は握り拳を掲げいかにも殴りたそうな綺麗な笑顔で智貴を見降ろしていた。なぜそうなったのかを一瞬で把握した智貴は逃げることなく、明日華を一生懸命にだめていたのだが、怒りは最頂点に達していたため一切の説明や言い訳もむなしく、その拳は智貴の頭に振り下ろされ、二度目の就寝となった。

授業が始まるなり亮は教室に現れ、智貴に目を移すとしばらく考えたのち、理解したのか手を合わせ、拝んだ後、口元をゆるめたまま席に座り、肩を揺らし始めた。無論、笑っているのである。

そんなゆるやかな一日だが時に強い視線を感じる。それは間違いないく、自分の背後というよりすぐ近くからなるものと分かっていた。

天条院奏。名家・天条院の一人娘にして正当後継者。成績優秀、容姿端麗、才色兼備のお嬢様。生徒会長の望月早苗に並ぶ美人にして人気者。彼女は編入そうそう学校内の有名人になっていた。たとえそれだけ多くの人間に認められたとしても帝にはどうでもよかった。自分の平和で温厚な日常さえ壊れなければ、とそんな甘い考えはあつという間に崩壊した。今では視線を視線を流し、存在感を無理やり感じないという技法まで手に入れてしまった。しかし、相手はそんなに簡単には流せないと理解したのはほんの数日前。彼女もまた自分のLVを上げ、こうも帝と戦闘を繰り返している。ここまで精神的にくる戦いは帝も初めてのことで、鬱に入らないかと不安になるほどだ。あまりにもしつこいので、ほんの少し盗み見るつもりで見れば、してやったりと笑顔をみせるのだった。

（まじで勘弁してくれ・・・）

本当に鬱になりそうだった。

鬱になるのは勘弁してほしい帝は、授業が終わるなり奏のもとに

寄った。

「あら、御前さんどうかいたしましたか？」

本人は自分は知らないと頬笑みながら、帝を見据えた。しかし、帝には見えた。その笑顔の裏に嘲笑う小悪魔を。その存在に身震いしつつ帝は自分の持つ疑問をぶつけた。

「一体どういふつもりだよ？」

「だから何がでしょう？」

「はぁ・・・とぼけんなって。なんで俺に視線向けてんのさ？」

「あら、私がいつあなたのことを見たいかと？ 自信過剰ではなくて？」

「まあ、実際ならな。全くあれとこれと返し言葉だけは立派なのは昔から変わらないんだな」

「あら、昔のこと覚えててくれたんだ。嬉しい」

「言葉に嬉しさがまったく感じられないのだが」

「愛が足りないわ」

さすがにこう来るとは思わなかった。目を丸くして、空いた口が塞がらなかった。返し言葉がうまいのは幼いころから体験したが、冗談を交えたのはこれが初めてだった。

くすくすと口を押さえ、笑う奏。それを見て少しほっとした。中学までは人形のように感情表現が苦手だった女の子がここまで感情豊かになっているのだ。彼女もまた変わってきた証拠だ。

「帝もいろいろ変わったみたいですけど、顔に出しやすいところは変わらないのね」

「うるせえよ」

「・・・本当にずるいわね。こっちは必至なのに」

「ん？　なんか言ったか？」
「何も」

ほほ笑むその顔は何事もないように見せてはいるが、その裏には何かあると悟ってしまっただが関わらないほうがいいと本能が告げていた。今はまだ、自分の生活を、日常を変化させるべきではないと。ただ、奏と話したことで少し安心してしまっただけということも事実。複雑な心は帝を不安定にさせる。しかし、そこは今までの経験で落ち着かせることにした。喧嘩をするときはいつもそうだった。高ぶった感情を抑え、冷静になること。それが帝にとって一番必要なスキルだった。怒りや高ぶった感情は力を与えるが、逆に自分を危険にさらす諸刃の剣と知っていたから。喧嘩を止めた今でもこのスキルは帝のポテンシャルになっていた。

「そつか。じゃあな」
「ええ」

二人の間に風が吹く。それは変化の風。きつかけの風。崩れかけた関係を取り戻す風となる。しかし、その風はまだ御用ではないと通り過ぎる。しかしその風がまた吹くのは遠くない話なのではないのかもしれない。

席に着く帝。すぐさまそばに寄る智貴。

「なんの話してたんだ？」
「ん？　何も」

片眉をあげ、納得のいかない表情を見せて、帝と奏を交互に見る。あまりにも二人がすつきりとした表情を見せていたため、なんかどうでもいいと表情が変わった。二人に、いや、帝に不満がないのな

ら問題ないと結論に至ったのだろう。

「そっか」

興味がなくなつたようで、席に戻り眠りについた。それを見かねた明日華が飛んできて辞典の角で殴る。鈍い音を立てて、智貴は動かなくなり何度目かわからない就寝となつた。

眠気と空腹に耐えて午前 of 授業が終わりを迎えた。終了の鐘とともに購買部へと走る貧乏学生たち。そんな中帝たちは悠々と食堂に向かつていた。暁学園の食堂は大きい。とにかく大きい。生徒数が1000人近くいるためほぼ全員入れるように設計したらしい。ちなみに暁学園は小等部・中等部・高等部が合わさって出来ているため、敷地も施設も大きい。その割には学費は公立と変わらない。その理由は暁学園の理事長がものすごい金持ちであるからだ。学校で儲けなければ他で儲ける。そのような考えで運営していると亮から聞いたことがある帝だった。ただし、曖昧の記憶ではあるが。

「皆何食べる？」

「ラーメン」

「AランチとDセット」

「蕎麦」

「蕎麦つて・・・亮それ持つのか？」

「俺から言わしてもらえば智貴のAとDのセットは異常だ」

なんのなんの、と笑いながらAとDセットさらにサンドイッチまで頼んでいた。負けじと帝はラーメンにチャーハン大盛り、餃子、ワンタンスープを頼んでいた。亮と明日華は呆れながら、蕎麦とパスタを頼んだ。それから智貴と帝の戦争が始まるのであった。

昼食を食べ終わるころには二人ともグロッキー状態で、一步も

動けないでいた。無論そのあと亮の皮肉と明日華の説教を味わいつつ、完食した。

あれだけ食べて智貴はグラウンドでサッカーをしていた。一体どうやったら消化できるのかと帝は疑問に思いつつ、木陰で休んでいた。明日華と亮は図書館に向かい、次の授業の予習をしているらしい。勉強とは無縁の二人には過酷の二文字しか浮かんでこなかった。

元気に走り回る智貴を見ながら風に当たっていると、風のように澄んだ声で声をかけられた。

「大丈夫ですか？ 無理でもなさいましたか？」

「あつ、いえ、だいじょうぶ、です」

そこには髪をそよ風に撫でられ、日光を浴びて美しい顔立ちで笑った奏がそこにいた。全くの予想外で驚きを隠せない帝。返事もなんだか中に浮いたままどこかに飛んで行ってしまった。それを微笑ましく見つめる奏。その笑顔で逆に冷静になっていく帝の脳内。驚きの表情も薄れ、そつぽを向いてまたグラウンドを見つめる。残念そうに溜息をつく奏。さりげなく帝の隣に座った。

「どうしてここにいるんだ？」

「私がどこにしようと私の勝手でしょう？ それともあなたは私のご主人様なのかしら？」

「・・・減らず口が」

「お互いさまよ」

ゆつくりと時間は流れていく。時間なんてさつさと流れてしまえばいいのにと自然に訴えかけてみるものの、そよ風と温かな春の日差しは余計に時間を長く感じさせた。少々この時間が嫌になってきたそんな時奏が口を開いた。

「私、よく独り言喋るのよ。どうせ他人に言っても通じないことのほうが多いから」

独り言ならと、帝は口を開こうともせずグラウンドを見続けた。たった今智貴がダイビングヘッドでゴールしたものの、そのまま地面に顔面キッスをして転げまわっている光景が広がっている。普通なら大爆笑ものなのだが、自分の周りの空気はそれを許してはくれなかった。そうして奏の独り言は続く。

「なんでこうなったんだろうって今でも思うわ。あの時ああすればこんなことにならなかったかもしれない。もう少し頑張ってみれば違う結果が生まれたかもしれない。だけど私は何もしなかった。・それはそうよね。あの時の私は世間を知らず、ただ家の中で英才教育を受けて育ったんだもの。感情なんて生まれはしないわ。ただつまらない日常を過ごして、成績が良いからって褒められることもない。そう、ただ退屈なそんな世界に私はいた」

上級貴族というのだろうか。庶民の帝には考えられない日々を彼女は送っている。その声の冷たさがその残酷さを物語っていた。奏の独り言は止まらなかった。

「だから姉さんが羨ましかった。感情豊かで、皆に愛されて、毎日が楽しそうで」

嫉妬。憧れ。どちらかわからないそんな曖昧な彼女の言葉達。知らず知らずのうちに帝は聞き入ってしまった。

「私は嫉妬していたのかもしれないわね。自由に楽しそうに過ごす姉さん。・・・うつん、違うわね。私が嫉妬したのはただ一つ」

緩やかな風邪は奏の髪を流し、周りの音を消してしまう。木々のざわめきに周囲の音が隠れようと帝は次の言葉を聞き逃すまいと集中した。

「・・・私が姉さんに嫉妬したのは・・・彼女が帝という男性に愛されていたこと、かしら」

木々のざわめきはいっそう周囲の音をかき消し、帝を考えさせまいと攻撃を仕掛ける。

そう、今のは独り言。彼女が勝手に言い出したことだ。関係ないと思いつつも視点はあちこちに動きまわり、そのうちそれに耐えれなくなつて頭上を見上げた。蒼い空が悠々と雲を流している。沈黙が続く。

キンコーン

予鈴がなり、グラウンドにいた面々もかたづけを始める。帝もその場から逃げるように校舎へと歩を進める。奏はただ一人、座ったまま無人となつたグラウンドを見続けているのだつた。

驚愕の翡翠

昼休みが終わり、授業開始の予鈴が鳴り響く中帝たちはまだ更衣室の中にいた。無論言うまでもなく午後の最初の授業は体育。夏のうねる暑さや、冬のかじかむ寒さとは無縁の穏やかな春のひと時。まだ胃袋の中で昼食たちがダンスしている中の体育は地獄をみるかのごとく厳しいのはだれもが経験しているだろう。そしてその内容が陸上。陸上は生徒が嫌がる種目の上位である。

「ハアゝ陸上かゝ」

「どうした智貴？ お前の大好きな体育じゃないか」

亮はあからさまに嫌味を言っているのが誰にでもわかった。さすがのマゾでも亮のサドには敵わないのではとそのような噂も流れるほどである。

「陸上は別！！ なんであんなときついスポーツがあるんだよ バスケとか野球とかばつかでいいじゃん」

「つまりお前は球技しかやりたくない」と

「？ いや、球技よりは武道のほうが好きだぜ？」

「まあ、おまえならそうだろうな。帝はどうだ？」

「今更好きなスポーツなんて言いあっても仕方ないだろ？ 俺は昼寝でいい」

そう言いながらしつかりと体操服にはなっているのである。クラス的面々が次次へと更衣室から出ていく。かなり遅れて帝、智貴、亮は出て行った。

グラウンドには3人以外の生徒が集まっていて、明日華や奏の姿も確認できた。先生の姿を探したが発見できないのでまだ来ていな

いのだろう。だいぶ安堵した帝。しかし、グラウンドをもう一度見ると女子2人組は男子の瞳をくぎ付けにしていたが、男子3人は女子の注目の的だった。いわゆるアイドルグループである。帝にとっては笑い物のそれに近い感覚だ。

帝たちはクラスの間々と合流する。丁度その時、体育の熱血教師が咆哮を雄叫びながら走ってきた。なぜこの学園には暑い教師しかないのかと疑問を浮かべる帝。一度この学園の教師雇用を考え直したほうがよいと本気で考えた。

教師の笛を合図に男子女子に分かれアップを行う。50周という教師の冗談を軽く無視して、いつも通り2周を終え、ストレッチを行う。念入りとまではいかないが、体をほぐしきって軽くジャンプしてみる。身体は軽く好調を感じ取った帝。

(種目によつては新記録でるな)

「今日の種目は男子は高跳び、女子は短距離だ」

女子からは大ブーイング。しかし、熱血故に心が強固な体育教師には効かないらしく、場所に着くよう急かした。渋々行動する女子。男子もやる気なく移動する中、智貴が話しかけてきた。

「ついてるな。高跳びだつてよ」

「何がついてるものか。今日高跳びなら今度は間違いなく短距離が長距離だ。先に面倒なほうを終わらしたほうが良いに決まってる。

ついてるのは女子のほうだよ」

「それにしてはやる気が見えるが?」

「俺は智貴みたいに体力があるほうじゃないからな。走るのは苦手なんだ。今まで逃げずに真っ向勝負を受けて立っていたからな。へたしたらお前より苦手だぞ」

「俺は運動全般が苦手だ」

足早に行ってしまった亮。にっこりと笑顔を見せながら智貴も走って行ってしまった。どんな表情をしていいかわからないのでとりあえず溜息をついておく。そのままゆっくり向かった。

女子は嫌々スタートラインに立ち、軽く走っていた。順番を待つ明日華にクラスメイトの女子が話しかける。

「ねね、やっぱりあの3人だけ目立つと思わない？」

「？ どの3人？」

「明日華と一緒にいる3人よ。あんな美形に、童顔、そして不良に見えないさわやか君。あり得ないでしょ。どうやったらあんなふうになるのよ」

「んゝそう？ よくわかんない」

「そりゃあんたがいつも一緒にいるからでしょ」

もう一人女子が参加してきた。今明日華と話している女子と仲がいい子だった。

「近いと意外に気がつかないもんだからね」

「あの3人結構人気なんだよ！美形の鶴君に、母性本能くすぐられるのに空手が強いギャップの鈴木君、喧嘩が強いのに不良って感じがしない清楚な御前君。女子としてはたまらないわけよ！！ おわかり？」

「んゝいまいち」

「あちゃゝダメだこりゃ。でもあんたが手を引いてくれれば私たちが近づきやすいわけよ！」

「??？ それこそわかんないよ。普通に話せばいいじゃん」

あまりの鈍さに2人は若干退いている。それでも明日華の頭の上

に疑問符が消えることはなかった。

「なあなあ帝、女子がこっち見てる気がするの俺だけ？」

「さあな興味ねえし、次お前だぞ」

「何センチ？」

「170だと」

「そっか、ならそろそろ背面だな」

何かを確信したように智貴は走りだし、170を飛び越えた。その瞬間男子からも女子からも歓喜の声が上がった。智貴に負けじと170を飛び越えた帝。体育の教師は驚愕のあまり、鉛筆を落とし、ランクAと叫びながら肩も落とした。

体育も終わり、男子も女子も更衣室で着替えをとっていた。男子からは雑な会話しか見受けられないが、女子の更衣室では帝、智貴、亮の話で盛り上がっていた。

「やっぱりあの3人違うよね。なんて言うの？　こう他の男子からは見受けられない何かがあるっていうか」

「ああ！　わかるよ！　この学園の男子ってぱつとしないやつ多いしね。3年生の郷田先輩とか副会長とかいろいろ人気だけど、なんか違うよね」

「そうそう、だってさ。あの自分はイケメンですってアピールしてる先輩いるじゃん？　確かに顔はカッコいいんだけど、ナルシストすぎだよな。けどあの3人はそれをイメージさせない感じ！」

会話を聞いていた明日華はくすくすと笑いだし、会話に入った。

「いや、あの3人はただ自由奔放なだけだよ。やりたいことやってるだけ。智貴はよく寝てるし、亮はゲームばっかだし、帝はぼけー

として暑苦しいだけだし」

「はあ、これだから明日華は」

「な、何よ？」

「あんたは毎日あの3人と一緒にいるからわかんないのよ！ ああ
！！羨ましい！！ 交換して！！」

「へ？ へ？」

勢いづくクラスメイトの気迫にちよつと怖気づく明日華。なぜか張り切るクラスメイトに疑問符を浮かべ、更衣を行うのだった。

「つぎなんだつけ」

「英語」

「よし、ふけよう」

「賛成」

更衣室から出た帝、智貴、亮は屋上で人休憩をしていた。智貴は少し高めの貯水タンクの下で仰向けのまま流れる雲を眺めていた。亮は入口の扉を塞ぐように背もたれたまま、ゲームをクリアしていた。そして帝は・・・

理由もなく手すりに腕を掛けて、焼きそばパンにかじりついていた。

「帝お前、運動の後すぐに焼きそばパンなんてくれるよな。しかもそれ、BIGスペシャルだろ？ 吐きたいのか？ なんなら俺がみぞおちで！！」

元気よく背面跳びで起き上がると拳を構えたまま、目を輝かす智貴に対して、目線だけを智貴に向けた。

「やったらころふ」

かじりつくと話すのがほぼ同時のせいか語尾がおかしかった。舌打ちをした智貴はまた横になった。

ゆつくりと時間が流れていく。珍しく明日華は呼びに来ず、そのま
ま一日最後の授業開始のベルがなった。

騒がしかった校内は一気に静かになり、より眠気を誘った。さすが
の亮も立ったままは疲れるのか、手すりに背中を預け、座りこんだ。
亮のゲーム音だけが屋上に流れていた。

ぎい、と扉が開く。

明日華ではないと感じた3人は気にも留めなかったが、一番危ない
人間が現れた。

「こらお前たち授業ははじまつてるぞ・・・つてのは建前だ。勝手に
しろ」

生徒からはダメ教師、先生からは頼れる先生と呼ばれる赤石徹が屋
上に来たり煙草をふかし始めた。

注意はするものの、叱ることは全くしなかった。帝たちにとっては
ありがたいのでほっとおくことにした。

「煙草、吸うか？」

「生徒に勧めないでください。おかしいでしょう常識的に」

「常識的ってなんだ？　んなつまらねえもんに縛られると何にも面
白くねえぞ。自由にしろ。こんな箱庭に閉じ込めるからいいじめとか
不良とかうみだすんじゃないの？　それにさ、御前、お前煙草ぐら
い吸ってたんじゃないのか？」　鬼の御前”だっけ？　有名人らし
いじゃないの」

少しばかりの挑発をかます不良教師。それにのる元不良生徒。

「不良だからって煙草は必ず吸っているわけじゃないですよ。逆に優等生のほうが吸ってるんじゃないですか？ 鬼の御前なんてただの名称ですよ。誰かが勝手につけた渾名です。俺にとってはどうでもいいことですよ」

「ふーん」

何かを見極めるように帝を見つめる赤石徹。

「やっぱり大したもんだなお前。2年前のこと気にしてんのか？」

その一言は予想外極まりない言葉だった。さすがの智貴も亮も赤石徹を睨めつける。対して赤石徹は口元をゆるめたまま帝を見つづける。

午後の風が4人の熱を冷まそうとしていた。

迷宮の紺碧

屋上に当る日の光は春先を温かく照らし、暖かな気候を与えてくれる。そこに清らかな風が春の匂いを運び、人は春を実感しつつ、居眠りをしてしまう。そんな麗らかな午後。しかし、暁学園の屋上は今にも戦争が始まるのではないかと張り詰めた空気がただよっていた。

煙草をふかしながら青空を見上げる赤石徹教諭。帝の視線も気にならないようであざ笑うかのように煙草の煙で円を描いていた。帝も根気勝負と感じたのか視線を一切そらさずに睨みつけていた。沈黙の時間は春の風によっていつそう強調され、時間が長く感じた。しびれを切らしたのは帝。

「どういうことだよ？ 2年前って・・・」

「ありや、1分半。意外と短かったね。お前って短気なの？」

腕時計を付けているわけでもなく、ましてや時計なんてものは視界に映るところには存在しない。鳥たちが羽ばたきを見せているだけ。

「なにごまかしてんだよ。2年前ってなんだよ」

「2年前は2年前だ。お前にとって重要な年だろ？ それとも違うのか？ まあそうだよな。お前にとって誰かが死んだそれだけだもんな」

「あんた…何言って」

暑くもないはずなのに、勝手に汗は流れ落ちてきた。手も汗ばんでいるのがわかる。鼓動が速くなり、葬儀の景色が鮮明に脳内に映し出された。そう、確かに2年前は御前帝にとって重要な年である。

天条院雪を亡くし、天条院奏という存在を知らされたあの日。あれ以降、帝は不良をやめた。

「知らないとは言わせないよん。なんたつて大企業の娘が死んで、あんたが不良紛いをやめた年なんだからさ。そう、未だに覚えているはずだぜ？ 天条院雪をさ」

天条院雪。その名前を聞いただけで、身体が暑くなり、なぜ知っているのかと怒りが芽生える。脳は痺れて麻痺を起し、何も考えれなくなる。なぜ？ なぜ？ 同じことを繰り返し唱えている。

「なぜ？ そんなもん決まっているだろ？ ……ふ…俺は天条院雪・奏姉妹の叔父だからだよ」

何を言っているのか理解できなかった。いや本当は理解していた。だが思考回路が現実に着いていけないのだ。ずっと拒否したい。しかし、目の前にあるのは紛れもない真実。逃げ場なんてどこにもない八方ふさがりの状態に帝は一瞬で立たされた。

「ん？ なんだ？ その間抜けずらは。ああ、あれか？ 仰天しすぎて何も考えれませんか？ ハッ、とんだお子様だな。鬼の名が泣くぜ？」

「コノツ！」

拳が身体に当たる鈍い音になる。帝は一步も動いていない。いつ動いたのかわからない間に智貴が赤石徹に殴りかかっていた。智貴の俊敏な動きも人外として思えるが、実際に驚くべき事実はその誰もが予想外の智貴の拳に赤石徹が反応して、受け止めていた事だ。煙草を口に咥えたまま智貴を見降ろす。智貴はかなり力が入っているのか、歯ぎしりが聞こえてきた。

「あぶっね」。鈴木お前卑怯だろ？ んん？ 第一教師に手を出さ
つてどうよ？」

「ふっざけんな！・・・あんたそれでも教師かよ。教師が生徒に絶
望与えてどうすんだよ！！いや！教師以前だ！！あんた人間として
頭どっか逝ってるぜ？！」

「俺も智貴に賛成だな。今のは少しでは補えないほどの言葉の暴力
だ。正当防衛として受け止めることも可能だと俺は思うがね。無論
それは子供の言い訳かもしれない。完全に手を出したのは智貴が先
という事実はひっくり返ることはないが、それでもあんたは教師と
してやってはいけないことをやったこともまた事実。PTAにでも
訴えればいいのか？ それとも校長、いや、理事長にでも話せば穩
便に済むが・・・どちらがいい？」

ゲームをしまい、反論の意を唱える亮。言葉の殴り合いは亮が一
番適している。亮が言ったことはすべてが正論で、迷うことなき事
実である。

これだけの批判を受けてなお、赤石徹は微動だにせずに煙草をふか
し終いには笑いだした。

「やれやれお前は本当に敵に回したくないな。別に俺は学校を敵に
してお前達を絶望に追い込みたいわけじゃない。ただの忠告だ」

「忠告？ それこそ馬鹿げてる。俺には喧嘩を売ってるようにしか
見えねえよ。舐めてんのか？」

眉間に皺がより、限界が来ている智貴。それに対してガンを飛ばし
たまま動かない帝。まるで何かを見分けるかのように。冷静でいた。

「別に先生が誰の知り合いだろうと俺には関係のないことです。俺

の中で雪も奏も・・・」

「違うな。同じ存在と言いたいんだろうがそれは勘違いだ。いいか？ お前の中で2人は同じじゃない。現にお前は奏を見ても何も感じなかった。だからこそ奏がお前に近寄っても素っ気ないんだよ。

お前が孤児のころ出会って惹かれたのは確かに奏だ。けどな、月日が経つにつれてお前の特別は雪になってるんだよ」

何も言葉が出なかった。悔しいからでも苛ついていていからでもない。真実だからだ。赤石の言葉は的を獲ていて返す言葉が見つからない。だから言えることだけを言うことにした。

「先生、貴方の言う通りです。俺の中で雪は物凄い大きな存在なんです。雪が死ぬ前も後も俺の記憶に心に雪がいるんです」

「だろうな。なら何故墓参りに一度も来ない」

「俺の中に雪がまだ笑っているから。死んだと確信したくないだけ。怖いんです。自分の中の雪が消えることが。迷っているだけ。皆がいてもいなくてもずっと迷い続けているんです。孤児の俺を友達として外に連れ出してくれた智貴も明日華も特別だけど、雪はそれ以上に特別になってしまった。ただ何もかもが幼い自分はそれを認識していないだけで、確かに俺は彼女のことが好きだった。・・・いや、今でもかな」

「お前の考えは良く分かった。だがな、亡き者を亡き者として見ずにいるのは死者への冒瀆だ。それは分かっているのか？」

「自分でもわからない。迷っていてどうしたらいいのか。どうすればいいのか迷ったままここまで来たんだ。昔は最強の不良なんて言われていたけど、それだってまやかしかだ。ただ、迷ってどうしたらいいのかわからないから力に任せて・・・だけど何も得るものはなかった」

煙草を吸い終わり、携帯灰皿に力任せに吸いがらを押し込む。

「迷えよ。17なんて迷ってなんぼのもんだ。俺らみたいな大人だって迷って悩んで生きてきた。今でも迷っている奴だっているだろうよ。俺だって悩んださ。あの家つつか家系が嫌で家を飛び出して、んで一目ぼれして、そのうちその子が転校することになって、連絡先を聞こうかと迷って・・・結末はサヨナラ。どんな奴だって迷うんだよ。自分だけと思うなよ。人生まだ先は長いぜ？ 高校で迷宮入りはしないもんだ。たった3年だ。今を楽しめよ」

高笑いしながら赤石は去っていく。今もまだ過去に囚われ続けている少年たちを屋上という自由に最も近い場所で何かを伝えようとゆつくりを背中を沿って扉を閉めた。箱庭に閉じ込められた3年間。少年たちはどう迷い進んでいくのだろうか。

迷宮の紺碧（後書き）

いろいろ忙しく投稿できませんでした。時間はかかるかもしれませんが少しずつ投稿します。お楽しみに！！

転化の緋色

少年たちは常に抗う。人生も現在も過去も。未来を構成して今やれるべき事柄を思案して生活している。そして苦悩は続く。そうこの数学という学校のカリキュラムにはない抜き打ちという小地獄に鈴木智貴は苦悩していた。

頭を抱え問題に向き合うが一切解けそうにはない。そんな姿を帝は腹を抱えて苦笑していた。

「こら！出席番号23！なにをしているかあ！！」

数学の教師が激怒しているのは23番の生徒。クラス1の秀才・亮。その本人は回答を裏返し、小説を読み耽っている。読んでいるのは恐らく伝記小説だ。

「何って・・・簡単ではないですか。小テストが終わったからアーサー・ペンドラゴンの伝記を読んでいるのです。・・・何か問題でも？」

「多いに問題ありだ！！テストが終わったのなら終了まで静かに待つ！学校の常識だ！貴様学校をなんだと思っている！！」

「何って・・・簡単ではないですか。小テストが終わったからアーサー・ペンドラゴンの伝記を読んでいるのです。・・・何か問題でも？」

「多いに問題ありだ！！テストが終わったのなら終了まで静かに待つ！学校の常識だ！貴様学校をなんだと思っている！！」

「何って若い間に無駄な知識を詰め込み、社会のルールを生半可に教える下らない箱庭ですよ。何が勉強は大切ですか。方程式も使わ

れると思わせぶりの微積も世の中全くと言って言いほど使わないではありませんか？知ってます？僕らが本当に使うのは「数学」ではなく「算数」なんですよ。つまり小学校で最低限必要なことは終わっているんです。中高大と無駄なことを繰り返しているにすぎないんです。現国や英語ならまだいい。無駄な理数をやるより社会のルール・常識を教えた方がまだ生徒にとって有効なんです」

何か文句でもとい態度で一瞥し、静かに読書に戻る。

こうなってしまった亮を正しい道に連れ戻すには至難どころか極みの領域であり、現に亮を正しい道に連れ戻そうとした教師5人（8人だったかな）は、呆氣に取られるならまだいい。新米の教師は泣き出したのだ。教師殺しの異名や、教師を泣かす非暴力生徒等と言った肩書きもたった一年でついた。この暁学園には、亮や俺といった異端は数多く存在するが、明石徹教諭には全く効かず、元最強の剛腕の不良である3年は明石の前で跪いたと聞く。

異端なんて中二病だれがつけたのか聞きたいくらいだ。出会ったあかつきには裏拳をくれてやる。

そんな裏の不良である私こと帝は相手を選ぶので、智将と呼ばれたことも一時期だけあった。

ため息で、チャイムがなる。号令と共に地獄の小テストが終わりを告げる。智貴は机の上で潰れていたのだが、10秒もすると、鞆と動じに起き上がった。

「なあ！！何処行く？！何処行く？！」

「ええい！！鬱陶しい！鼻折るぞ！！」

「帝コワイ！ニゲロ」

妙なテンションと共にその場から飛ぶように走る馬鹿は奇妙な笑い声を発声させて、その後教師に怒鳴られていた。

「智貴どうしたの？何か変よ？」

「さあな。アイツがおかしいのはいつものことだが、大方テストが最悪だったんだろ？俺もボロボロだ」

「アレ？帝にしては珍しいじゃない。テストが駄目だなんて・・・」
「俺は基本学問は苦手なの！」

駄々をこねるように顔を赤面しつつ言い訳をしていた。
それを微笑ましく思えたのか明日香は笑っていた。

「むっ？なんだよ？」

「なんでもない」

その中、教室の隅でポツンと身支度をしている女生徒が一人。

「よう、一人か？」

「帝・・・」

そう、転校生にして日本有数の大企業天条院家の一人娘天条院奏である。

「ええ、一人よ。どの学校でもそうよ。私は結局孤独なの・・・
どこにいたってね。姉さんを亡くしたあの時から・・・」

誰にもかまってもらえず、親にも必要とされていないそんな悲しい日常が見えた。

それは過去の自分にも当てはまることで、勝手に身体が動いていた。

「一緒に帰るか？」

「えっ？」

それはとても意外だったようで、その瞳は丸みを帯びていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5485i/>

暁の空

2011年7月13日19時07分発行